
栄光をたたえて TEP × MURT

鎮西馬敏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

栄光をたたえて

TEP × MURTT

【NZコード】

N45900

【作者名】

鎮西馬敏

【あらすじ】

2005年、兵庫県新天市。弱小吹奏楽部・県立新天高校吹奏樂部の新顧問に突如大抜擢されたのは、はたから見ればただの歴史オタク、実際は相当の努力バカ、当吹奏楽部OBの歴史科教諭、斯シ^{バリュー}波劉介だつた。

斯波には夢があつた。現役時代に果たせなかつた、尊敬する顧問の先生を、吹奏楽の甲子園・普門館に連れて行くこと。認めざるを得ない才能・鎧矢辰悦に出会い、昔の自分・古河力オルに出会い、過去の確執を共有する男・千林裕也に再会し・・・・最初は一方的

な彼のタクトをばきに振りまわされてばかりだつた部員たちも、次第に斯波の意志をくみ取り、心に近づき、そうして彼らは斯波の音楽を描き出す奏者となる。

努力することは、強くなること。

天才にはなれなくても、努力の秀才には誰だつてなれる。

「才能あるやつらだけが良い演奏をできるわけじゃない。良い演奏をしたいと努力した奴らの音が、本当に人を感動させるんだ」

絶対に越えられない壁があるとは認めたくない。才能や限界の存在を知りながらも、それでも努力の力を信じてがむしゃらに指揮を振る、青臭い壯年シバリューの描く音楽は、どうなつていいくのだろうか。

・・・王道な吹奏楽青春小説ながら、事実上の主人公が熱血な顧問の先生という設定で進んでいく物語。ぜひ、ご一読ください。

序曲

力オルの耳に蘇える。

あの時夢見心地に聴いた曲が。

吹きながらとなりで聴いた曲が。

力オルには聞こえた。

胸にしみわたる温かい音が。

静寂を切り裂く鋭い音が。

おどぎ詰みたいに愉快で滑稽な音が。

吹雪となつて襲いかかる連符の嵐が。

心揺さぶる熱い音が。

力オルは肌に感じた。

その奏者の温もりを。

その奏者の力強さを。

その奏者のユーモアを。

その奏者の厳しさを。

その奏者の情熱を。

力オルはその音を聴くたびに思い出した。

今の自分があるのはその奏者に逢つたからだと。

・ · ·

序曲

「つおつ、リューちゃんじゃないか。どうしたんだい。」

優しい日差しが窓に触れる。満開の桜の花びらで、風がピンク色に輝いている。

駅前にある横丁商店街。今日は全ての店が休みを取る日で、どこもかしこも皆シャッターを下ろして出払ってしまっており、たまに春風が練習中のウグイスの歌声を連れてくるだけの、時間も音も見当たらない、そんなアーケード。そこへ一台の車が止まつたのは、まだ太陽が南中していない頃だった。

突然の来客のために注ぐコーヒーに、四十を過ぎた星悦の親しい顔が映つた。

いただきます。中肉中背のその男は黙つてコーヒーを飲んだ。

「お前は僕の子どもの学年じゃないから、同じ学校でも全然噂なんか耳にしないから、どうしてるか気にしどつたんや。元気そうでなによりや。」

男は一口飲んでカップをおろしながら、ゆつくりと店内を見回す。外で『楽器店マーキュリー』のぼりが揺れている。店内がジャズで満たされている。

「壁がだいぶ茶色くなつたな。俺、いつからここに来てなかつたつけ？」

「かれこれ十七年ぶりやな。確か開店の日に顔出しててくれた時以来やと思うわ。」

「いい味が出ている。」

男は立ち上がり、節くれだつた荒れた手を、壁に当てた。

「あの頃は、俺、結構大変だつたよな。」

男は呟く。

「まあ 確かにいろいろあつたけどな。それで、今日はなんや。ほんまは休業日やけど、リューちゃんは特別に応対したるわ。楽譜か？それともこれの修理？」

星悦は右手でピストンを動かす真似をして、一ヤリとした。

「ああ」男も微笑を見せた。「そのことで、今日来たんだつた。
・・やつとこれを直してくれないか?主管のくみがひどいんだ
けど。」

そう言いながら、男は足元のケースからサビだらけのトランペッ
トを取り出した。

星悦は受け取り、眼を細めて調べながら、男の方を見た。

「・・頑張れば出来んことはないけど、わざわざこんなオノボロを
使つことはないやろ。ペシトなら他に持つているんとかげりつん?」

男は笑みを消し、少し真面目な顔をして。

「あの時のトランペッタなんだよ。」

「あの時・・・?」

星悦は眉をひそめて男の顔を眺めていたが、思い当たるとこりが
あつたのか、眼を一瞬大きく開けて、すぐに怪訝そうに、眼を震わ
せて男を見た。

「まだ持っていたのか?」

「その時の傷だ。」

男は大きく窪んだ主管と、一部折れ曲がったベルを指差す。

「ええんか、こんなのは直して。思い出したくないやろ?」

「イヤ・・。今の自分に至る出発点は、このペシトなんだ。今は感
謝の気持ちさえ抱いているよ。何も聞かないで、直してくれ。」

「お前がええんなら、僕は何も文句は言わん。」

星悦は旧友に優しく笑った。男は修理の間、店に飾つてある楽器
や譜面を眺めたり取つたりしていた。

やがて星悦が。

「そうや。リューちゃん、うちの子どもがな。」

一階にある店の扉が音を立てた。黒い学生服を着た若い顔が見え
た。

「ただいま、父さん。」

「おう、噂をすれば、何とかってヤツやな。」

高校生らしきやの子は薄つすらと灼けた顔を、男と父親に向かた。

「……」じんにむは。 お密さん? 「

「せやけど、お前、こん人知らんのか? お前の学校の先生やぞ。 斯波先生。」

「あ」 その子は慌てて頭を下げた。 「すみません。 尊はお聞きしてしましたが……」

「四六時中ハニワと戯れている変なオッサンとかこうのだか、どいつせ。」

「いえ、そんなことは」

「楽器やつてるだり?」

「え?」

「トランペッタだろ?」

「……なんで分かるんですか?」

「俺の口と似てるから。」

男は、狐につままれたような顔をしてくるやの子を見て、悪戯っぽく笑つた。

「辰悦、この人は父さんの長い友達で、高校の時新天の吹奏楽でトランペット吹いとつたんや。 んで、今年からブラバンの顧問になるんや、な?」

男 斯波は軽く頷いて。

「けど、指揮なんて振つたことないから、果たしてできるかどうか。

」

「リュー やんなら大丈夫や。」 星悦は斯波の背中を叩いた。 「辰悦、お前がこれからお世話になる先生や。 リュー やん、ご指導の方よろしくな。」

「え……?」

今度は斯波が星悦を見た。

「リュー やん、僕さ、ボーンやる前にみつけただけペッタやつてた時あつたやろ?」 こつな、ちつちやこときオモモチャのラップが

大好きで、小学生になると、ペットやりたい言^ウて聞かんくて、しやアないから僕が教えてやつてたんや。せやのに中学に入つたら水泳部に入つて、でも長続きせんくて途中で止めて、高校になつたらブラバンに入る言つていたのに、往生際が悪ウて、一年経つてもよう入ろううとせ^エへんのや。

「父さん、先生に余計なこと言わないでよ。」辰悦は少しムキになつて言った。

斯波は辰悦の顔をまじまじと見た。太くきつとした眉、高めの鼻、奥に何か光るものがある、大きく、優しい瞳。

星悦の物ではないと、直感した。だが、妙な懐かしさを感じずにはいられなかつた。

シンエツ 辰悦・・・鏑矢、辰悦。

「――という」とは、一年生?」

「え? あ、はい。」

「地歴の選択があるだろう。何を取つているの?」

「日本史です。」

「・・・もしかして、一組?」

「はい。」

昨日見た名簿が頭に浮かんだ。そうか、やつぱり星悦の息子だったのか。それにしても、昨日は彼をどんな人物だと考えていたのだろう。テンポ良く、小気味の良い返事。快い。

「それじゃあ、俺が受け持つクラスだ。よろしくな。」

斯波は辰悦に笑いかけ、星悦を見た。

「いい息子さんだな。」

「へ?」星悦はぽかんとした。「ああ、それはおおきに。」

そう言つて、星悦は自分と背丈のあまり変わらない辰悦の肩をポンポンと叩いた。

「よかつたな。褒めてもらえてよ。」

斯波は星悦の顔を見た。それから、そつと彼の左手に目を移す。

斯波には人や物をじつと見る癖がある。斯波が無口になつて自分

の手に視線を注いでいるのに星悦は氣づかず、頬に曖昧な笑みを浮かべた。

「ああ 指輪なら、とつての昔に失くしたわ。」

「・・・やうなのか?」

斯波は顔を上げた。

「女房が事故で死んだのも十一年も前の話、七回忌まではやつたはずやけど、それからは記憶になり。女房も、もう自分のことは忘れてくれって、冥土で言つていてるに違いないわ。」

まるで他人事のように星悦は語る。「事故」とこつ言葉に、辰悦の体がビクンと脈を打った。

「そうか・・。」

全く、妙なこと考えるヤツだな、俺は。それじゃあ、この子は母親似なのだろう。

だが・・・心の虫はなおも斯波の疑念をつつつく。

自分の子なら、これほどまでによそよそしいだらうか。

表面には出でやしない。

「・・・『じめんな、変なこと訊いてしまって。本当に、すまん。』

「ええて。」星悦は、からからと笑つた。「リューさんとはもう七年も会うてへんから、この子が生まれたのも家内のことも知らんのはしゃあないて。・・・全く、そんな青菜みたいな顔せんと。塩かけたろか?」

「ありがと。」斯波の顔が緩んだ。「星悦はいつになつても優しいな。」

無邪気な星悦の笑みの後には、手がくたびれた薄黒いティベアが、ちよこんと座つていた。

「どうもありがと。おかげで見違えるほど綺麗になつたよ。」

星悦から手渡されたトランペットは、磨かれて再び銀色の輝きを取り戻していた。

「そう言つてもむりうとうれしいわ。また楽器壊した時は、いつでも

直したるで。」

「人聞きの悪い。」

星悦と辰悦は店の外まで斯波を見送りに出た。斯波は、何か光るものを見た。辰悦の目をもう一度よく見た。

「この目。思い当たる者もいないわけではないのだが。
・・県新で、会うのを楽しみにしてるよ。」

「はい。」辰悦はうなずいた。

すると、星悦が思い出したかのように。

「ケンイチには、もう会つたんか？」

「ケンイチ　？ああ、兼吉。あいつ、またここに戻つてきたのか
？」

「おう。しばらく元町で店開いとつたんやけど、やっぱこっちがえ
え言ウて、五年前にこの商店街に移つたんや。ほら、あそこの店。
今日は休みやけどな。」

『中華亭』。赤地の暖簾に書かれた金色の文字
が揺れている。

「なかなか旨いんや。暇な時でええから、寄つてやつてくれ。」

それから斯波の耳元で囁く。

「あいつ、お前との約束、まだ覚えてんねん。それで今一人息子を
シゴいとる。」

斯波は顔を遠ざけ、不意を突かれたような顔をした。それを見て
星悦はニヤリとし、斯波の背中を車の方へ押した。

よく笑うヤツだな。相変わらず。

斯波は苦笑いをにじませた。

「それじゃあ、また。」

「おう、じゃあな、リュー ゃん！」

車は商店街を後にした。出口の桜がきらめいていた。

新天横丁の駅前を過ぎれば、曲がりくねった『蛇の背坂』に至る。
その坂を上りきれば、学院大学まで春なら見事な桜並木が見られる。
地元の人はここを『学園花通り』と呼んでいる。その通りに沿つて

左側にあるのが、県立新天高校だつた。

（女房のことも、もう忘れてしもつたわ。）

平然と語る星悦の顔が眼前によみがえる。

そんなに簡単に、忘れられるものだろうか。

辰悦の顔が浮かんだ。

・・・・

息子、か。

斯波は左手を顔に寄せ、その薬指にはまつた、磨かれて光を放つ指輪をしばしの間見つめた。そして、しっかりと刻まれたその名に、そつと唇を合わせた。

第一樂章 宝島（一）（前書き）

今後、すべての章のタイトルには、その章で中心となる吹奏楽曲の曲名をつけていくことにします。

第一樂章はT-SQUAREの「宝島」。吹奏樂経験者なら一度は聴いたことはあるかと思います。シバリューなりの青臭いこの曲の解釈について書いていただければと思います。

第一樂章 宝島（1）

第一樂章 宝島

1

よく晴れたものだ。大空を泳ぐ鯉が本当に気持ちよさそうだ。憩いの森もロータリーの植込みの木々も、青葉の枝を大きく広げている。高校の敷地は鮮やかな緑で顔を染めて笑っている。

大型連休が明けても、教室からも職員室からもまどろんだ雰囲気は消え去らず、昼休みの職員室では、教諭たちが土産話に花を咲かせていた。

久しぶりに実家に帰つてくつろいだ話。慰労の為に温泉に行つたはずが、行き帰りで大渋滞に巻き込まれ、目的地でも賑やかな連中が風呂を占拠していて余計に疲れた話。東京に行つた、四国に行つた、話の内容は十人十色。

しかし、そんな話題もどこ吹く風で、参考書と石器で埋もれた机に向かつて、黙々と一人遊びをしている教諭がいた。壁にもたれて談笑していた大西は彼に目が止まり、話していた田岡にそつと耳打ちをした。

「ねえ、先生　　斯波先生、さつきからずーっと静かになんかしてはりますけど？」

大西の言葉に、田岡はさしたる反応は示さずに。

「あー 斯波先生なら、まだどつかの博物館でハニワ買いはつたそうですね。」

大西先生は目を丸くした。

「ハニワ。また？ てか斯波先生つて買わはらへんでもハニワ、ようけ持つてはりますやん。」

「あー、『たける君と仲間たち』やろ。今度のは『ディヂーらし』いて。

「デイチー。」

二人は、花輪を巻いたハーフを頬擦りする斯波の姿を、しばし眺めた。

「それよりも大西先生。」田岡は声を潜めて言つた。

「斯波先生、今年から吹奏楽の顧問になりはつたやろ？まあ、うちの吹奏楽は、こんなん言ウたらアレやけど、存在価値の見当たらん部活やし、離任された小林先生もそないにやる気のあらへんヒトやつたけどな、ちょっと斯波先生には務まらん氣がするんや。いや、生徒がどうのこいつのつて話じやない。なんつうか　はつきり言ウて、斯波先生

あまりにも変人すぎんか。」

「いや先生、それは言いすぎですわ。・・まあ、確かに斯波先生はここに来てまだ一年ですから、この学校に慣れてはらんかもしませんけど、でも先生、去年三年の日本史の個別指導して、第一志望に合格させたやありませんか。ミテクレは変かもしけませんが、技量はほんまもんやと私は思いますけど。」

自分の意見に同意が得られなかつたためか、田岡は顔をしかめた。

「でも、それはそれ、これはこれですよ。吹奏楽の顧問はハーフと遊んどいていいだけやないんです。生徒一人ひとりの技術を高めるサポートをせんとあかんし、コンクールでは指揮も振らんとあかんのですよ。吹奏楽の生徒の中にも、例えば古河とか、眞面目に頑張ろうとしている子もいるんです。経験の薄い教師が顧問になつたら、そんな子はやる気をなくしてしまふんとちやいますか？」

大西は、肩にかかつた髪を優しくかき上げ、やわらかな笑みを浮かべた。

「顧問になりはつて一ヶ月たちましたが、何の問題もないようですから、生徒にも結構ウケがええんとちやいますか？それに、聞いた話では、斯波先生　あの永岡先生の教え子らしいですよ。」

田岡の動作が一瞬止まつた。目を見張る。

「永岡先生て・・・あの、永岡先生？」

「ほかに誰がいはります？」

大西は声爽やかに田岡に尋ねた。

田岡は押し黙つて、もう一度、何気なく斯波の方に目をやつた。
斯波はニタニタしながら、自作の土俵でたけるとディイヂーに相撲を取らせていた。

五月晴れの日には、外に出て弁当箱を開くのがいい。そう思つて
いると、ほら、真っ白な講堂の外に生徒が集まつてきた。

彼らはここ県立新天高校の吹奏楽部員だ。

最初にコンクリートの講堂前の地面に腰を下ろしたのは、爽やかな笑顔が印象的な細身の男子と、肩をすくめて背筋の曲がり、やたらと周りを見回す男子の二人組だつた。

「それでさあ・・・」肩をすくめた男子は座り切る前に話の続きを
し始めた。爽快な男子は彼の話に熱心に耳を傾けている。

「今年のコンクールの代表校の予想ですかね？」

「そうですね。」肩身の狭い男子は顎をゆっくり前に突き出した。
頷いたらしい。

「問題は、関西代表なんですね。」

「どうしてなんですか？」

「だってほら、コンクールにはさ、三回全国に出たら次の年は出られないっていう決まりがあるでしょ。そのせいで今年は清流が出られないから、関西代表の席が一つ空くわけ。」

「西原商業と、九重南と、あと一つってことですか？」

「そうですねわ。」肩をすくめた男子は顎を突き出した。「兵庫は強豪が多いからな。明石第一だと、県立衣笠^{いかさ}とかがそこに入るかもしれない。でも大阪の涼泉や京都の御所ヶ原も外せないし、この四校が横並びとなると、いよいよどこが行くのか分からぬええ。

いざれ話さねばならないので、ここで一旦休憩して、吹奏楽のコンクールについて話をしようと思う。

まず、吹奏楽コンクールのスタートは地区大会だ。その上に県大会、地方大会と続き、頂点が東京の普門館で行われる全国大会だ。地区は七月の末にあり、県は八月上旬、地方は下旬、そして全国は十月に開催される。

次に表彰の仕方だ。まず、プログラムの全団体の演奏が終了すると、A、B、C、Dで評価された各団体の審査の集計がなされ、その後審査発表が行われる。発表では全て団体に「金賞」「銀賞」「銅賞」が贈られる。だから、「銅賞」といっても、決して三位という意味ではないのだ。そして、全団体の表彰が済み、それぞれが三賞のどれかを受賞したところで、次の大会の代表校が発表される。この代表は「金賞」受賞団体から選ばれる。つまり、「金賞」を取つても代表になれるとは限らないのだ。少しややこしいかもしれない。ここで惜しくも代表から漏れてしまつた「金賞」のことを、俗に「カラ金」とか「ダメ金」とか言つたりする。

県立新天高校の場合は、最初が西阪神地区大会、次に兵庫県大会、関西大会、全国大会へと駒を進めていくことになる。

背が曲がり肩をすくめた男子が熱心に今年のコンクールの代表校の前評判を話していると、四人の女子がその横に座り込んだ。

「オリさん、またコンクールの話してんの？飽きへんなあ。あ、おつす、リツちゃん！」

「こんにちは。」横川律人は爽やかな笑顔で、おさげ髪の女子に会釈をした。

そのおさげ髪の子の横の女子は、オリさん 織田光慈の話に興

味を抱いたようだ。

「清流が出ないって、本当?」

「ほりカオル、こんな奴相手にしちゃダメやつで。こここの頭はブラバンでぎつしりなんやから。」

「いわゆる、ブラバンオタクさあ。」

その横の女子が弁当箱を開きながら、からからと笑った。眉毛の

曲がり具合が絶妙だ。

おさげは続ける。

「ここの前も今年の課題曲の話すーっと聞かされてた。ほり、何やつたつけ、パ なんとかつてこいつの、ほり、あれ。」

オリさんは、もじもじしながら。

「『パクス・ローマナ』だよお。」

「あーそれ世界史で今日習つたー。『ローマの平和』でしょお? 垂れ眉の女子は、箸を片手にキャツキヤとはしゃいだ。

「そう、そのパクス何とかが、ローマ帝国の軍隊をテーマにしただけのどつひのひのつて、問わず語りで延々と聞かされて。正直ウンザリしたわ。」

「・・・聞かしたんじやあ、ないよお、あれはあ 独り言だもの。」

弱々しい声に少し抑揚をつけて、オリさんは言つた。強く言い返したつもりのようだ。

「独りで課題曲のことぶつぶつ口にしてるのも、結構問題よね。」 髪を頭のてっぺんに結んだ女子が、エビフライを箸で摘みながらわざわざなく口にした。逆三角に縁取られたレンズが光る。

「ですがコード、なかなか言いませぬえ。」

おさげはおむすび片手に満足そうに笑つた。

「清流が出ないって、本当?」

おさげの横の子がまた訊いた。オリさんはもじもじしながら。

「ええ、そうですよ。」

「そうなんだ・・・。」

その子は小さく溜め息をついた。

「・・・でも、あの学校はマーチングにもお、取り組んでいるし、コンサートもたくさん開いているから、暇になることはあ、ないんじゃないかな。」

かばうようにオリさんが言つた。

空に、一直線のヒロー・キ雲が流れている。おさげはそれを見上げて、やりきれない笑みを浮かべた。

「ま、コンクールのこといろいろ話したって、ウチらには関係ないよ。どーせ今年も銅賞だし・・・。」

「曜子ちゃん。」

垂れ眉は急いで口を挟み、おさげにだけ聞こえる声で、力オルと呟いた。

「あ」とおさげは顔色を変えて、垂れ眉と反対側の自分の横に座るその子を見た。

「ごめん・・・力オル。」

「いいよ、そんな。もう忘れたし。」

力オルはせわしく手を横に振った。複雑な笑みを浮かべながら。

力オルは、二年前の春、私立の清流学院高校を受験した。進学校であるだけでなく、部活動も盛んで、バレー部を始めとして運動部は近畿大会の常連であり、吹奏楽は全国経験もある強豪校だ。これほど的好条件が整い、しかも力オルにとって手が届かない学校ではなかつた。

だが、力オルは落ちた。新天高校に入学後届いた成績通知。一点差で散つた夢。

なにやつてるんやろ、わたし。

この前、曜子の誘いで清流学院の定期演奏会を行つた。立ち見が出るほどの大盛況。ステージに立ち並ぶ部員のオーラ。指揮棒が振り下ろされた瞬間、多彩に、壮大に繰り広げられる音の祭典。

・・・マジ、ヤバイ。

曜子の感じた震えは、カオルにも伝わってきた。繊細なフォルテ、重厚なピアノ。今の自分には到底真似できない、巧みな表現力。その中で特に光っていたのは。哀愁と滑稽を見事に吹き分けた、アルト・サックスのソロ。その透き通った音色に、一人はあつとう間に吸い込まれた。

七色サックス。曜子が呟いた言葉。

今もカオルの目の前に鮮明に映し出される。そして必ずそれについて来る思い。

なにやつてるんやひ、わたし。

カオルの気を察したかのように、おさげの曜子がため息をつきながら言つた。

「でも、ほんまに上手かつたなあ、七色サックスの『愛を奏でて』。」

「七色つて、なんですか？」律人が尋ねる。

「清流の定演でソロ吹いてたサックスの男子のこと。」

「あ、それ、千林君やろ？あの入ウチらと同じ年らしいで！」垂れ眉が話に加わる。

「うそお！プロ級に上手いで、あの人！」曜子が目を丸くする。

「千林　　ああ、確かに清流の顧問の実の息子ですよね。」オリさんも続く。

「めっちゃイケメンさあ。」垂れ眉の未来はうつとり皿じりが垂れている。

「まあ・・・」三角縁の和音かずねはあくまでマイペースだ。「確かに、ここのブラバンは清流の比になるはずもないし、カオルが失望するのも仕方のないことよね。」茶に口を添える。

「おいおい部長が言つちゃああ・・・。」オリさんはもじもじしながら。

「コードの言う通りさあ。」未来が手を高く上げて和音に賛同した。

「部員少なくて楽器そろわないし、練習場所の講堂は暑いし寒いし

苦情来るし、おまけに

顧問は・・・

「そう、それ！」曜子が未来に向かって指を差した。「だいたいシバリューってさあ、」まあ面白くて授業も楽しいし生徒のことよく分かつてくれるけど、と早口で付け加えて、

「吹奏楽の指導能力、ないでショ？」

「確かに、小林先生と交代してから今まで、一度も顔を出さずにただ基礎練やれって言うだけで、まだコンクール課題曲も何も配つていませんからね。」律人が苦笑いした。

「シバリューは今までハニワばつか相手しどったから指導の仕方分からんのはしゃあないけど、副顧問のカイリューは前からいるんやから、なんかすりやええのに！」

「何や、ポケモンみたいやね。」未来が笑う。

「奥原先生は、小林先生がいたときからずっと事務の仕事ばっかりやらされていたから。」

和音は静かに茶をする。

「はあー」未来はおおげさに肩を落とす。

「先生がやる気ないんやもん、今年もどうせコンクール無理さあ。出場料の無駄やつて。それ使わないで毎年貯めていつたら、新しい楽器一本ぐらいい買えるんじやない？」

「そんなこと言つちやあ・・・」オリさんはもじもじしながら。「小林先生は、『ンクールは賞じやない、出ることにイ、意義があるんだつてえ、言つていたしい・・・

「意義。何が意義？ 大会出ても何一つ得るものなんてあらへんやん。」曜子が口を尖らす。

「そうね。あえて言つのなら、劣等感、あきらめ、仲間割れ・・・

和音が指折り数えていると、駐車場のほうから内股で走つてくる化粧女が見えた。とたんに曜子と未来の顔が渋る。

「来た来た、ペンキ女・・・」

「超バツドタイミングさあ。」

ベンキ女、と密かに咎つけられた女子は、五段の石段をへロへロになつて昇り、アクセサリーを山ほどぶら下げた黒いカバンをジヤラジヤラ揺らしながら、和音と未来の間にヘナヘナと座り込んだ。

「ぐあ～、すーがくの小くてすとほんま疲れた、あ！」

語尾をヤケに強調する口ぶりがヒジョーに特徴的で、聞く側の瘤に障る。

「ねえ聞いてヨオ未来ちゃ、ん！」

「はいはいはいはい、一体何さあ？」

未来が眉間にしわを寄せても、相手は全く彼女の嫌悪感に気がつかない。アクセサリー好きの女子は、マスカラを塗つて大きくなつた瞳を、嬉しそうに輝かして。

「璃紗すーがくほんまあかんワア！いや、マジで！五問中二三問以上正解で合格の小テストさあ、十回も〇点とつたんやから！そしたらニシダが、西園寺、お前はもうべんとうくつていいぞ、つていつてくれてえん。すゞくなくなきない？璃紗〇点しかとつてへんのに補充ぬけだせてんで、え！」

さも血漫げに彼女は語る。

「十回も課題作つた西田先生の方がすごいわ。」

曜子はよく通る声ではつきりそう言つた。とたんにアクセサリー

好きのネコ田が曜子を、ギロリと捕らえる。

「トダさんにはしゃべつてへんわ！かつて話にはいつてこんといてや。マジキモイ、イー。」

「『キモイ』なんぢゅう言葉はな、自分の顔見てから言つもんやで。」

「

曜子は何のダメージも受けず挑戦的な笑みを浮かべて言つた。

ネコ田は意外と氣が弱い。言い返せないくらいの傷を負い、スグに丸くなつて、優しいかわいい後輩に援軍を求めた。

「ねエリッちやあん、なんかいかえしてよつ！璃紗なんもわるいこといつてないのにイ、なにあいつウ、ほんまムカツクウ！」

「まあ、まあ・・・気にしないことですよ。」

ハハツ、と律人は愛想よく笑い、曜子にも恐る恐る会釈して、公平な立場を表明した。

「ところで」元気は？和音がオリさんに問いかけた。オリさんはスパゲティをずるつと吸い上げて、モゴモゴしながら言つた。
「さあ・・・今日は見てないですがねええ。彼もまたあ呼び出しなんじやあ、ないですかね。」

ふう。和音の紅茶に波紋が広がる。

「最近よく野球部の練習に混じつているのを見かけるの。バカな考え巡らせていいなきやいいんだけど・・・。」

「あの方。」璃紗が見ていた鏡を閉じて言つた。

「こんどから、璃紗たちのこもんかわつたんでしょお？だれだつたつけ？」

「え？」力オルは一瞬怪訝な顔をしたが、すぐに腑に落ちて、答えた。

「ああ 斯波先生？」

「グエーツ、シバリューなん？ウソオん！璃紗にほんしの小テストの補充まだいつてないのにイ・・」

この世も終わりのようだ。彼女にとつては。

「お前そういうや、四月からクラブ来てなかつたもんな。」と曜子。

「あ、そろそろ先輩、斯波先生つて、県新吹奏楽部のOBらしいですよ。」

「えつ？」

今度は曜子と未来と力オルの三人が目を見開いた。

「あ そんなこと聞いたことがあるわ。」和音は最後に残した玉子焼きを食べる。

「どういうことどいうこと、それ？」

「なんか、鏑矢さんに聞いたんですけど、昔、永岡先生つて、吹奏楽界で名を馳せたすごく偉大な先生が県新のブラバンの顧問してはつた時があつたらしいんですけど、それで県新が初めて全国に行つ

た時、鏑矢さんと斯波先生、一年生だったそうですよ。」

「ええつ、ジャズのおっさんが？シバリューと同級生？」と曜子。「リツちゃん、斯波先生って何の楽器吹いていたの？」とカオル。

「トランペットだそうです。」

「ねえ・・・」

「全国つてさ、普門館やろ？すげえシバリュー！」

「普門館のステージつてさあ、黒光りして自分の顔が映るんやうつ？」未来は興奮して。

「永岡先生で、今どこにいるの？」とカオル。

「ねえ・・・」

「ええと、確か神戸の方の学校に飛ばされてえ、何年も前には定年したらしいですよ。」

「青海高校ね。それと、清流学院の千林先生は、斯波先生と同期の部員だそりよ。」と和音。

「青海つて、昔は全国の常連校だったといひじゃなかつた？」とカオル。

「うわあ、すげえ、じゃあ、今年はさ、永岡先生の教え子対決が見られるつてことやな。んー、なんかウチ、わくわくしてき」

「んもお、きいてよオ！璃紗怒るよッ。それでさあ、シバリューつてエジュギょうとかきびしいから、やっぱりれんしゅうとかキツくなるんかなあ？やつたら璃紗、バイト出来んくなるからめっちゃこまるウ！クラブやめんといいかんくなるわあ。どうしようつ？」

「えー ゃんえーやん、あんたがクラブ辞めたら、クラブもつと樂しくなるし。決定はお早めにな。」曜子は嬉しそうだ。

「つるせーっ」璃紗はふくれつ面をして怒鳴った。

ちょうどその時、威勢のいい、よく通る声がカオル達の後ろからした。

「オーッス！」

未来が振り向いて、

「あ、元氣君！」

「久しぶりやなあ、浜岡。どないしたん？」

「お、知りたいか知りたいか？俺な、今まで野球部の整備手伝つとつてん。今野球部の体験入部やつとんねんけど、俺さ、動きがいいつて先輩に褒められてん。入ればレギュラーも間違いなしかもな、ハハツ」

「え、つてか浜岡つて、運動神経良かつたんやね。文化部やのに。」

嫌味を嫌味と感じない璃紗は、ソーセージを食べながら平凡な声で感想を述べた。

「す」いですねえ、先輩。」律人が爽やかに言つた。そのせいで元気はますます団に乗つて、

「やう？見てるよお前ら、夏には県新野球部のエースになつて甲子園からテレビ越しにみんなに手エ振つてやるからよー。」

「エースつて、浜岡君ピッチャーなん？」

「ほつとき未来、自己陶酔、自己陶酔。」

曜子は垂れ眉の下の目を真珠のように輝かせる未来をなだめた。
「元気。」和音が普段より大きな声で口を挟んだ。思わず元気の姿勢が改まる。

「本当に野球部入る気なの？聞いた話だと、野球部つて運動部の中でも一番練習が厳しいらしいよ。」

「心配はいいですよ、部長。」元気はおどけて答えた。「俺は好きなことは多少しんどくても手を抜かずに地道に努力するタチなんです。」曜子たちの方に向き直つて。「お前らも、俺をバカにするのも今のうちだけやぞ。すぐにでも甲子園で俺がバットを振る姿が見られるようになつからさ！」

「それつて、三振ばつか、てこと？」

とたんに元気の甘栗頭が焼き栗みたに赤くなつた。

「ちげーよ！そー人のことバカにすんのいい加減にしろよ、戸田！」

元気はそう言って、ふとロータリーの横の時計を見た。

「みんなもそろそろ急がんと、五時間目間に合わんよつになるで。んじゃ、ブラバンのみなさん、お達者でえ。俺は今日から野球人だア！」

元気はちらりとカオルの方を見て、一ツ、と浅黒い顔に満面の笑みを浮かべた。カオルは思わず目をそらした。頬が少し赤らむのが分かつた。

「ちょっと、なんなら退部届は？」和音が叫ぶ。
「さつき置いときました。」

「どにに？」

「貝原先生の机の上。」

和音が顔色を変えて口を開いたのを、元気が出鼻をくじいて。
「後始末は宜しくお願ひします。んじゃさよなら！」

足音に比例して後ろ姿がだんだん小さくなつていく。

和音は立ち上がった。

「私はちょっと音楽準備室行つてくる。みんなはもう戻つていいくから。」

曜子が眉をひそめる。

「え？ コード、どうする気？ 何したつて無駄やつて。」

「でも、退部届だけは先生来る前に取り戻してくるー元気のお父さんにバレたら、厄介なことになるでしょう？」

そう言って、和音は弁当箱を片手に、足早に講堂の横にある音楽棟に消えていった。

璃紗は立ち上がり、んーと両手を伸ばしてのびをした。他の人もつづいて弁当を片付け、歩き出す。

「浜岡先輩がいなくなつたら、チューべどうするんでしょうね。」
ひょっこりと律人が後から顔を出すと、曜子はさあねとだけ言った。

「オリさん、浜岡の担任 誰やつたつけ？」

「世界史の田岡先生ですね。田岡先生、浜岡君とこのラーメン、大好物ですからねえ。浜岡君が野球部に転部したことが田岡先生に知

れたら、すぐに浜岡君のお父さんの耳に入りますねえ。」オリさんは肩をすくめた。

「でもさあ、元気君が野球やつたら絶対かっこいいさあ！甲子園もなんかもうお隣さんみたいに近くなつた感じやね。」

未来の真珠の輝きは璃紗にも伝染する。

「まあ浜岡はべつにきょうみないけどお、でも野球部が甲子園いつたらブラバンでおうえんいけるから、ヤッパリがんばつてクラブつづけちゃおうかな、あ？守口先輩が間近で見られるチャンスかもしれないし。ああ、最高 ん！」

「のんきやね、あんたちは。」曜子は呆れて後を振り返つた。

その直後、予鈴が鳴り、生徒達は慌ててロータリーを回り、校舎へ走つていったのであつた。

石畳に映るソテツの影が、少し傾いた。玄関から稚魚の大群のように出でてきた生徒のも今はまばらとなり、目の前の白い講堂から、ブーだのピーだのペッポーだの、不規則な音楽が飛んでくる。ブラバンが音出しを始めたのだ。

CDを再生させる。換気扇が回り、ライターの火が光り、シューと白い煙が勢いよく流れでは消える。斯波の耳には、在学の時と変わらないかまびすしい音の応酬が飛び込み、

瞳には、昔のままでいてくれた白い講堂があつた。

長いこと止めていた煙の味が、最近むやみに欲しくなる。胸の奥からムズムズと、何かが這つて出ようとする感触に襲われると、昔はいつもタバコを手にしたものだった。ただしそんな時は、斯波はいつも指に大事にはめている指輪を、静かに外すのであつた。

扉が開く。大柄な男性が入ってくる。眼鏡の奥の冴えた瞳は、樂

しいのかも怒つていいのかも、なんの感情の機微も示さない。斯波はこの瞳に見られるについ喫煙に集中して、吸い過ぎてよくむせるのだが、今日の男の瞳は、どこか柔らかな感じがした。

「あ、すみません。勝手にCD借りてます。」

「どうぞどうぞ、おかまいなく」

男は静かにプレイヤーに耳を澄ませる。

「『五月の風』。九七年の吹奏楽コンクールの課題曲ですね。これは そうか、青海高校最後の普門館での演奏。指揮は永岡憲吾氏。氏の最後の指揮でもありますよね。」

斯波は男を見た。

「当たりです。よく聴かれるのですか?」

「ええ、まあ。前任の小林先生が永岡氏指揮の演奏のCDをよくお聴きになりました、それで自然と演奏曲に関する事柄が私の記憶の中にも入ってきまして」

題名にふさわしく、颯爽と駆け抜けるような伴奏に、メロディーの木管が軽やかに乗つかつて、新緑の朝を優しく描く。

朝、か。

オレンジ色に映える灰皿に、タバコを押し付ける。
夕焼け空には、合わないよな。

それでもCDは止めない。

「貝原先生、そろそろ、話して頂いてもいいのでは?」

「何のことです?」

「おれ いや、僕を、地歴公民科で音楽とは無縁の男を、どうして吹奏楽部顧問に推薦なんか、されたのですか?」

男 貝原の目元と口元が緩む。

転調して、トリオが始まる。クラリネット単独の親しみあるメロディー。

「いえ、そんな大したことじゃないです。先生は突出した素敵なものモアをお持ちの方ですから、そんな面白い人が作る音楽ってどんなのがなあ、って思つただけですよ」

「今の僕が作る音楽なんて、大したものじゃないですか？」

斯波はタバコを取り出しかけて、すぐに戻した。

「でも、正直、吹奏楽部の顧問になれるなんて夢にも思つたことがないんで、すごく嬉しいです。」

貝原は黙つたまま、机に向かい、パソコンの電源を入れた。

「そんなことおっしゃって」

貝原の口元がかすかに緩んだ。・・・笑つた？

「・・・はい？」

「先生、実は音楽と近しい関係なんでしょう？」

課題曲が終わり、自由曲に移る。

「じことなく不吉な響きが、勢によくクレッシェンドされる。トランペットのファンファーレが高らかに鳴り響く。斯波の顔が思わず歪んだ。

レスピーギ作曲『ローマの祭り』より、第一曲・チルチエンセス、第四曲、主顯祭。吹奏楽コンクールでは定番の曲目だ。そして斯波にとつては

「え・・」

「音大に通つていらした頃から、顧問になることだけを考えて生きてきたらしいですね。ある人から聞きました。」

トランペットのファンファーレと、盛り上がりしていく短調の重奏。

換気扇から、もくもくと白い煙が一続きを読む

「どうして、そんなこと」

貝原の瞳から真意が読み取れない。一気に吸い込まれそうになる。

危ない。

「つあえず、急いで時計に目をやつた。

「あ、すみません、申し遅れました。」

斯波は咳き込みながら話を切り出す。

「何ですか？」

「僕、今日用事がありまして。申し訳ありませんけど、旦締りよろしくお願ひします。あと、白鳥にこれの「ペーー頼んでおいて下さい」膨らんだ茶封筒を差し出す。

「明日は午前中を使ってその合奏をすると『忘れておいて頂けますか。』

「しかし、土日は部活動をすれば」の部の保護者会が黙つてありますかせんよ」「

斯波は思わず笑みをこぼした。

「それを片付けるのが先生のお役目でしきう私は素材調べのために時間が必要なんです。それでは。」

貝原に話す隙を与えないまま、斯波は逃げるように準備室を去った。

後に残された貝原は、やれやれと疲れた顔でしたが、何かを思い出しても、にんまりと静かな笑みを顔に広げた。

鍵を開け、銀色の愛車に乗り込む。

車内の空気は、いたさか淀んでいた。窓を開け、MDをまわす。

エンジン音とともに、トランペッタの銀色の音が響く。

ウイナーズ　吹奏楽のための行進曲

無伴奏の中光るソロトランペットが、ホルンやオーボエを引き連れ、やがてクラリネットの優しい、コラールのようなメロディーに落ち着く。

一〇〇三年、吹奏楽コンクール課題曲、第一番。今から一年前のことだ。

東京の普門館に響き渡る、黄色い音、純白の音、淡い音、太い音。

トランペッタのファンファーレが、次第に熱くなつてくるメロディーの後で、弱く、しかし存在感をはつきり示しながら、トロンボ

ーンによる最初のメロディーを導き出す。

斯波は万華鏡のように表情を変える音楽に聞き入りながら、しかし、両手はぎゅっと、ハンドルを余計なほど強く握りしめていた。

先生、実は音楽と近しい関係なんでしょう？

俺が音大を卒業したこと、あの先生、知っていた。

斯波は自分の手が煙草の入ったポケットに伸びていることに気づき、急いで引っ込める。

貝原先生。

あの人、昔の俺のこと、知っている？

「ある人」って、一体誰なんだ？

俺が音大入ったこと知っているのって、星悦と、兼壱と　あと二人。

一人は、俺が過去を忘れるのを望み、陰で俺を嘲笑う、千林裕也。

もうひとりは、俺を過去にいつまでも執着させる、あの日以来ウツツから跡形もなく消え去った、恋人にして最愛の妻・玲子。

俺はかつて、この一人の姿が脳裏をよぎるたび、気が狂いそうになつたものだが、いつの間にかその影は薄れ、今の今まですっかり忘れていた。それが、あの曲を聴いたとたん、全てがよみがえり、俺に突然襲いかかってきた。

曲が最高潮を過ぎ、バンド全員で奏でた重厚な響きが、再び、ただ一本のトランペット、そこに回帰していく。

突然よみがえる金管のファンファーレ。終止符の前、低音のベーの音が曲を締めくくる。

千林。俺はあいつを今でも許せないのだろうか。

玲子。俺はまだ許されないのでしょうか。

俺はまだ、過去から離れられないまま、今に至っている。

永岡先生。やっぱ俺、吹奏楽に戻つてこなかつた方がよかつたのでしょうか。

リピート再生で、ソロトランペットが再び響きだした時、開け放つ

た窓から全く同じ旋律が飛び込んできた。

ステレオだ。

斯波は思わず車線から外れ、広くなつた場所に車を止めた。車は衣笠釜市との境、嫁川まで来ていた。

MDを止め、河川敷から響くトランペットの音源を探す。

いた。橋梁の柱に寄り添つように立つ、学生服姿の男。斯波はあつと声を漏らした。

あの子は、星悦の店にいた 　　そうだ、確か、鏑矢辰悦という名前の。

辰悦は離れた車道にいる斯波の存在に気づかずに、クラリネットの旋律を軟らかく奏でる。斯波は車の横にたたずんだまま、包み込むよつの音色に聞きほれていた。

辰悦は自分の音を確かめるように目を閉じて、ウイナーズのメロディーを独奏し続ける。

・・・

きっと、優しい性格なんだろうな。星悦によく似て、周りを和ませ、心地よくさせる雰囲気を、彼もまた備え持っているのだろう。

斯波は思わず身震いがした。

生まれながらのトランペッターって、こんな奴のことを言つんだ。なんだか、すじぐ、快い。

俺、やつぱり音楽が好きなんだ。それでも、吹奏楽が好きなんだ。
・・永岡先生。俺

一曲を吹き終わり、辰悦はふと車道の方を見上げた。

銀色の車が一台、沈み行く夕日を浴びて、松明のように川面を照らして川縁を走り去り、消えていった。

静かなところへ行きたい。

川辺は闇に包まれようとしていた。

静かなところへ行って、あの音を再生したい。

斯波はハンドルを握り、ただそれだけを考えていた。

嫁川の河口辺りまで来て、斯波は車を止めた。周囲は既に色を失い、点々と家屋の明かりだけが、とうとうのように浮かんでいる。

斯波は車の窓を開け、シートをゆっくりと倒す。

無音の空間の中、心の音が、次第に鮮明になって聞こえてくる。

ド　シ　ソド　・・・　ソド　レッシィファ　ミ　レ　、
ド　ミ　・・・

真っ暗の舞台の上で、辰悦のトランペッタだけが、光を浴び、暁と響いている。

斯波はもう一度繰り返す。『ウイナーズ』の最初のトランペッタ・ソロを。

ド　シ　ソド　・・・

すると、辰悦にだけ当たっていたスポットライトが、だんだんと大きく広がっていく。

ホルン。トロンボーン。オーボエ。フルート。そして、クラリネット。やがて、スポットライトはバンド全体を柔らかく照らし出す。その楽団の視線を集め、中央で指揮を振っているのは、斯波自身だった。

すごいな。

斯波は目を閉じながら、心中で呟いた。

あいつのトランペッタ。あの音から、全ての楽器の音が生み出され、ある楽団の一つの音楽にまで発展していく。あいつのトランペッタは、音が鳴ったその瞬間から、その曲の合奏の全体像を描いているんだ。

全体の音が想像できる。バンドの響きがひしひしと伝わってくる。

あいつとなり・・・俺は叶えられるかもしない。

あいつの音楽に俺が本気で挑めば、誰にも劣らないアンサンブルが引き出されるに違いない。

斯波の目に映っているのはもう、一人のトランペッタ奏者ではな

かつた。ホールに響きわたる、勝者を讃える厳かなコラール。それを演奏する、一つの楽団だった。

でも、なんだろう。あいつのペットの音・・・快いのこ、どこか胸に引っかかる。

「ブーッブー！」

眼前的演奏会の情景が、あつという間に引き裂かれる。なんの愛嬌もないクラクション。驚いた斯波はハンドルに頭をぶつけた。

「おい、寝とんのか、アホンダラ！一本道に堂々と車止めんなよ！ 非常識やろ！」

この後は洪水のような罵声が飛んできたが、斯波はその内容より、声色に注意深く耳を傾けていた。

威勢のいい、太い声。これは・・・

「おい、オッサン、目覚ませ！」開いた窓から太い腕が伸び、斯波の胸座をつかみ上げ、懐中電灯を斯波の顔に押し付けた。しかし、斯波の顔を見たとたん、腕の主はあつと声をあげ、急いで腕を放した。

斯波は彼の姿を見て、思わず笑った。

「オッサンは、お前も一緒だろ？ 兼壱。」

「・・・劉介か？」

月のない空に、小さな星が点々と現れる。

「何でこんなところ運転してたんだ？」

「知り合いの店に、ラーメンを届けて来てん。あ、俺、横丁商店街でラーメン屋やつとるから。」

「ああ、星悦から聞いたよ。行こうと思つてたんだけど、それどころじゃなくて・・・」

ほい、と兼壱は車の中についた水のペットボトルを斯波に投げる。

「ううう時は『一』がよさげやけど、どうもカフュインはダメでよ、
ちょっとでも飲むと眠れねえんだ、と苦笑いを浮かべる。

「それどこのじやないつてえと、やっぱ ブラバンか？」

斯波は肩をすくめながら、笑って頷いた。

「音大でもペシトしか吹いてなくて、指揮なんて初めてなのに、今年の夏はコンクールで指揮を振らなきやいけないなんて、ひどいよな？」

「でもスゴイで。顧問なんてそういうなれるものじゃないもんな。コンクールの自由曲はもう決めてんのか？・・やつぱ、『祭り』か？」

兼壱はマジマジと劉介を見る。斯波はペシトボトルに口を当たし。「いや・・今のレベルから言つと、まだの大曲は無理だな。いいのか悪いのか、うちの部は三年生がいないから、来年もほぼ同じメンバーを組んでコンクールに出られるから、今年の夏は、とりあえず小手調べ、つていうことで、来年、イケそつなら、自由曲に選ぶ。

「じゃあ・・・自由曲に選ばないつてこと、あるんか？」

「かもな」

兼壱は黒い川に目をやり、弱い声で、劉介、と呟いた。

「なに」

「・・いや、劉介、なんといこにおつたんかな、と聞きたくなつて。」

「ああ・・・言わるとそうだ。家と正反対の方向へ、どうして車を走らせて来たのだるつ。静かな場所なり、いくらでもあるはずなのに。」

「辰悦君、だつけ

「え」

「星悦トコの子」

「ああ 辰悦や」

「さつき河川敷で吹いてた」

「へえ」

「音聞いたとたん、身震いがして。しばらく、車止めて聞いてた。」

「ハハ・・劉介もかよ」兼壱の白い歯が闇に映える。

「俺も、つて」

「いやや、俺も前に星悦の店で吹いているの耳にしてさ。確かにビデるよな、あいつのペット。ペットのお前が言つんだ、実力はほんまもんなんやろな。」

「なんだか、面白くなってきた。俺」斯波は水を含み、星夜に流れる風を見上げた。

「あいつの音聞いてたら、まわりで演奏する仲間の音も聞こえてきたんだ。俺の耳の中で、何度も広がった。あいつの生み出した、完成された音楽が。あの音楽の響き、あの雰囲気を、俺、他のやつらにも聞かせたい。俺があいつの音楽を引き出すことが出来れば、きっとすごいことが起るると思つんだ。」

「具体的には」

「・・・・」

思わず兼壱を睨む。兼壱は小さく笑い、せせらぎに視線を戻した。

「俺、心配してたんだ。お前のこと」

「まさか」

兼壱の芝居じみた口調に斯波は笑つたが、兼壱の表情はやわらがなかつた。

「俺な、お前が大人になつて、綺麗な奥さん貰つて、可愛い子供に囲まれて、幸せな結婚生活なんていうぬるま湯に浸つてゐるうちに、辛酸を嘗めて誓うたあの約束を忘れてしまうんじゃないかつて、心配やつたんや。」

「兼・・」

「もちろん、俺がお前が幸せになるのを妬んだ訳やあらへん。エエ大人になつた今さらに、高校時代の約束覚えてるかつて聞くのも、

バカバカしい。よお分かつてゐる。でもな」

高校三年の夏、県新を最後に去つた日がよみがえる。

上履きから譜面台から何まで、全てを鞄に押し込んで、誰の迎えもない朝。手には楽器ケースを提げていた。

劉介。

講堂のほうから声がする。振り返る。兼壱と、星悦。

兼壱は会つなり、いきなり頬を殴つてきた。

ケンイチ、何するんや。真つ青になる星悦の顔。

劉介。兼壱に睨まれる。

逃げたら、今度こそブン殴る。

もう殴つてんぢやないか。俺が頬を押さえながら笑つて起き上がると、兼壱は急に顔を歪め、涙を流し始めた。

ちよちよつ、ケンイチ、大丈夫か？慌てる星悦の顔。

劉介。兼壱が水氣の多い声で言う。

普門館、行けよ。俺達の代わりに、永岡先生を普門館へ連れて行け。俺は大人になつたらもうパー口やらんかも知れん、やからお前が県新の吹奏楽部顧問になつて戻つてきて、俺の子供らを、永岡先生編曲の『祭り』で、全国に連れていつたつてくれ。・・もし拒否したら、ブッ殺す。

あの時の仁王顔にも、年とともに優しい目じわが刻まれ、親友の兼壱は白髪の混じる働き盛りの男となつて、今、斯波の前にいる。「お前が音大に入つて、卒業した後もプロ目指して頑張つていて知つたときは、まだ約束覚えとつたんやつて、嬉しかつた。そやけど、川上さん やない、玲子さんがいなくなつてから、連絡途絶えてしもうて、俺、お前が氣イ狂つて海でも飛び込んだんやないかで、心配やつたんや。」「大げさな」「大げさやない。そやつたら、教師として県新に戻つてきたとき、なんで真つ先に俺たちに会いに来んかった？俺、そーいうのメチャクチャ腹立つンや。ブン殴りなくなるくらい。」

「じゃあ殴れよ、今」

「ふざけんな。子供の先生、親が殴れつか」

「別に俺は、ふざけてなんか」

「劉介」

兼壱は斯波と田を合わせようとしない。ずっと川を見ている。

「絶対、普門館、行けよ。行かんだら、今度こそ、ブツ殺す」

「・・物騒な話だな」

「俺は本気だ。この一十云年間、ずっと待つてたんや。こんなチヤンスつかんで、みすみす逃すヤツがあるか。そやから、先生」
さつと兼壱は斯波の方に向き直り。

「うちの息子、頼ります」

「」斯波は何かを言おうとしたが、心にある塊は言葉となつて出てこなかつた。

すると、いきなり兼壱は深々と下げていた顔を上げたので、石頭が斯波の顎に直撃した。

「ガアッ！」

「イテツ、と・・ハハハ、すまんすまん。なあ、どやつた、俺の演技。涙チヨチヨ切れの名俳優つて感じやなかつた」

兼壱の顔は嘘のように晴れやかだ。斯波は思わず顔をしかめて。

「・・最悪だ」

「あれつ、そないに？」

「クサイ三流小説のアレよりも、もっと、いたたまれない、というか、痛々しい。」

「ひでえなあ。定期演奏会の劇では、一番人気を博した俺が・・・」
二人は思わず笑つた。

「・・ま、えつか。劉介」

「なんだ」

「時間、あつか」

「ああ。帰り道だつたから」

「じゃあさ、ちょっと飲んでかねえ？俺、知り合いの店でうまいと
こ知つてんだ」

「ちょっと、おい」斯波の顔つきが豹変する。「アホ、飲酒運転させ
る気が？俺もお前も店の主人も、みんな逮捕されるぞ。明日の朝刊の一面に載つたらどうする」

「ええやんか、一度俺新聞に載りたいと思ってたんや」

「無理無理、俺、トランクに火縄銃のレプリカあるから、なおさら、
無理。」

「大丈夫や。その店で泊まらせてもらえればええから。な？」

「・・・・・全く」

よし、じゃあ俺について来い、兼壱はそう言つて車に乗り込む。
斯波は久々に、友人という神聖な温もりに浸かり、あたたかい溜
息をついた。

「てか、なんできょーぶかつあるつン? ジょーびでしょお?」

天気予報では今日は真夏日の暑せらし。べずれかけた化粧の上から新たな化粧の層を塗つたくなり、璃紗がピーピー口を尖らせる。「他の部活はフツーに練習あるやん。ない方が不自然なんぢゃうん? それより」

曜子は汗を手で拭いながら、苛立たしそうに返した。「あんたさあ、暑いって分かつて何でワザワザ化粧する? そんなにケバいのが好きなわけ?」

「ちいがあううーつ。これはあ、日焼け止めなんよ。けじょうとひやけどめのくべつもつかへんの? へつ、ばーかばーか!」

「こいつ・・化粧も濃いけど、キャラも濃い。」

「突然変異がなんかじやない? 天然記念物にでも指定しつけば?」

未来の言葉に、カオルが思わずくすりと笑う。

「ちょっとお、かかるちゃん、いまわらわんかつたあ?」

「えつ、ううん、全然」

「こいつのには正直に言つたまうがええんやで、カオル。その方がこいつの為にもなるんやから。」曜子が諭す。
璃紗が顔を上げて。

「あ、リッちゃんや!」

「ほんまや、オリさんもあるさあ。」

「おつす、リッちゃん、オリさん。」

「こんにちはあ。」

「みなさんおそろいで。」

白く照り輝く講堂の前の広場に、六人は集まつた。

「コードは?」カオルが尋ねる。

「ああ、白鳥さんは、斯波先生のところに行っていますわ。なんでも、頼まれた原譜の「ペリー」を渡しに行くとかなんとかで‥‥」

「「ペリー?」てことば、やつと合奏始めるンや。よかつたさあ。」未

来は垂れ目に皺を寄せる。

「シバリコーもようやくやる気を出してきたんかあ。な、よかつたな、西園寺さん?」

「あほなこといわんとこでよお。璃紗にそがしくなつたらバイトこまるつてこうたやろお?」反抗する璃紗の顔は泣きそうだ。

「あ、みんなおはよう。」

音楽棟の方から和音が現れた。

「あ、コードおはよう」

和音はオリさんの方を向いて言つた。

「オリさん、元気はまだ来ない?」

「ええ・・・昼までには来るつてえ、言つてましたけど。」

「昼までに部活は終わるんだけどなあ。」和音は溜め息をつく。

「えつ、どないしたん、浜岡が部活に来るン?」曜子が目を丸くする。

「うん‥‥」

「野球部の方は、どうなるんさあ?」未来も続く。

「なんかもう、どうでもよくなつたみたい。」

「なんちゅー、えーかげんな。」璃紗が呆れて。

「やっぱ、あいつは続かんかつたか。」曜子は肩をすくめる。

「あ、でも、今日は別の用事もあつて、元気は来るらしいのよ。」

「なんなん?」

「なんか、ブラバンに入りたいっていつ友達がいるから、その子を連れてみんなに紹介したいって。」

「げつ? ブラバンに入るん? こんな部活に?」

「ねえねえ、その子、女の子？それとも男の子もあ？」

「男の子よ。」

「いやつたあーー。」未来は背中を大きく反り、拳を強く突き上げる。

「ええ？ なあ、かずねちゃん、なんねんせいなん、その」Jへ。」

「ええと、一年生。だから同じ年。」

「元気先輩の話によると、その人は『マーキュリー』の『J』子息だそうですよ。」

律人が爽やかな口調で語る。

「え？ ジャあ 鎧矢君？」とカオル。

「そんなヒト、おつたかなあ？」

「ていうか、ジャズのおつさん、結婚してたつけ？ 奥さん」曜子が眉をひそめる。

「みたことない、みたことない」未来は大きく首を振る。

「それって、危ないんじゃあ、ないですかねえ。そのあ・・・」

「不義の息子」

「いやあ、曜子ちゃん、眞面目やないんやから。そんなドロドロしてんの」

「島田」未来の背後から低い声がした。思わず未来の顔色が変わる。

「ひやつ、シバリュ、じやなかつた、斯波先生！」

斯波は重たい目をしていたが、怒つてはいな「よつ」だった。

「朝からギャアギャア騒ぐんじやないぞ。まあ・・・朝と言つても、もう九時を大幅に過ぎてしまつてているけれど。練習開始予定時間とつぶに過ぎてているから、早く中に入つて。白鳥、譜面配つたか？」

「あ、いえ、まだです。」

「それじゃ早くみんなに配つてやつてくれ。さ、早くみんなも楽器出して、準備しろよ。十時半に四四一ヘルツでチューニングした後、即、合奏始めるからな。」

「はーいっ」

斯波は「コリと笑い、また音楽棟の方へ消えた。
ふうひ、と未来が胸をなでおろす。

「よかつたさあ、シバリューで・・本気で怒られるかと思った。」

「シバリューはガミガミ怒る先生やあらへんさかい」曜子が笑う。
「ていうか、十時半まであと一時間もないですから、譜面全部さらう時間もないですよ。」

律人が途方に暮れた顔をする。

「大丈夫やつて。打楽器なんて適当に叩いとけば誰にも分からへん。」

「無理ですよ。かえつて目立ちますつて。」

「あの、「コード、」めん、譜面もりえるかな?」

「あつ、そうね、ちょっと待つて。楽器庫に置き忘れてきちゃったの。」

「なんで謝るン、カオル?」

「なんとなく・・」

「それじゃあ、みんなも早く楽器出して。先に来た子たちがもう合奏隊形作ってくれているから。」

「はーい」

カオルたちは口をそろえて答え、靴箱のほうに向かった。

「大きいのが、一、二、三千円と、八百円のおつりです。毎度おおきに、また来てや!」

帰る客と入れ違いになつて入ってきた男を見て、レジにいた兼吉は田を丸くした。

「およつ、星悦やないきーどないしたんや!」

「どないって、別に、ラーメン食いとつなつただけやで。みそ、食わしてもらおか。」

「毎度アリィ！」ダルマのような、大きいくいかつこ田で、兼壱は星悦を上から下まで見た。

「かれこれ一月も会わなんだ。ま、あつこに座つてゆつくり話でもしようや。あおい！」

「はーい。」給仕をしていた女性が顔を上げた。

「ちよつとレジやつといんか。んで至急みそラーメン特盛二つ、五番テーブルによろしく頼むわ！」

「ちよつと待てって、僕特盛なんて頼んどらん。」

「俺のおじりじや。ありがたく食え。」

「ええけど、父ちゃん、まさかまたサボる気やないやうね？」

図星を差されて、兼壱は赤くなり、

「ばツ、ばか言えツ、俺はナ、大事なお客さんが来てるから、ゆつ

くつそのお方とお話でもしたいんだヨ。サボる気なんて毛頭

「あ、ジャスのおっちゃんこんにちは。」あおいは愛想よく会釈した。

するとすぐに厨房から、怒涛のような罵声が襲いかかってきた。

「あんたア、せいえつちゃんならお向かいやねんから、いつでも会えるやろ！人手たりんから早よこつち戻つて仕事しんかい！」

「つるせーなあ。俺は昼休み取つてねーんだぞ！」

「昼間しか営業してへんのに何で昼休みが要るんよー。ウダウダ言わんど、早よ戻りイ！」

ガランゴロンゴバツチャーン！厨房で何かが吹っ飛んだ。

頭上で繰り広げられる夫婦ゲンカに、店の中の客は、ラーメンを食べながら、なんとなくいたたまれない様子だつた。

「奈美ちゃん、相変わらず、怖いな。」

星悦は兼壱にそつと囁いた。

「ほつとけ。あいつは俺に文句を言つのが趣味なんだ。」

兼壱は白い歯を二ツと見せた。いたずらうつ子のよつて、妙に可憐な笑みがあつた。

「イツも、昔と全然変わらないよな。

星悦は、温かい溜息をついた。

五番テープルに座つてゐると、ほどなく給仕が盆に茶を載せて奥へ出でました。二の人も兼吉の娘だ。

から出てきた。この人も兼壱の娘だ。

一 はい、ジヤズのおっちゃんの分。

お前が、んがサンニ、いやおまか一屬されいにな
たなあ。ほんまに現代版藤壺つて感じやな。
」

星説の言葉に兼毫の娘は歯がゆそづな笑みをこぼした。

星悦の言葉に兼吉の娘は齒からぞきが笑ふをこぼした

た
?

「知らんわ。」藤子はつんとして。「自分で淹れろって、女将さん
がやうてはつまつたナゾ?」

彼女は涼しげな顔をして去っていく。

「おー、藤子！」兼吉は舌を打った。「・・・たく奈美子のヤツ、

いい年して子供っぽいことをするもんだ。全く

「この元凶はお前じや？」

「ヌツ！」

星悦は口に令

「……おまえ、ちゃんと手洗いや。

兼壱は太い眉を寄せて、顔をお手拭でぬぐつた。

めんめん

「お前に何の顔持かんていり。なんとかく氣持が悪いんだから、ドン心がく薄いもんね。」

ことなえぬかるむを、もう奥に迷つた方がええよ。

「ここは俺の店だ。俺の好きにして何が悪い。」

ムキになると、いかにも青筋の浮き出る兼毫をみた星悦は、やれ

やれと寒い溜息をついた、壁にかかっている『中華亭』の一つんで

『の品書きに目を移す
しばしの沈黙のあと。

「はあい、みそラーメンの特盛一人前でーす。父ちゃんちゅうと、手、どけて。」

「・・あ、おう・・」

兼壱は急いで手を引っ込めた。星悦は給仕に顔を向けた。

「ああ、明子ちゃんも手伝うてんのか。大学はどうしたん?」

「今日は午前の授業が全部休講で、サークル行くにも時間があるから、少し暇つぶしに。」

「はあ、それで家業の手伝いか。感心やな。」

「おっちゃんも、食べに来てくれてありがとう。おおきに。」

次女の明子はやわらかな笑みをほほにうすらと浮かべた。

「・・あ、父ちゃん。母ちゃんが、ジャズのおっちゃんとは長い付き合いやし、確かにしばらくゆつくりと一人で話することもなかつたやろから、今は好きにしなさいって。ただし、あの皿洗いは全部ひとりでやることつて言つとつたで。」

「なに?」パツと兼壱の顔から青筋が消えた。

「そうかあ、あいつが折れたかあ。珍しいなあ、ハハ。よしよし・。分かつた。いくらでも洗つたるわあ、て言つとけ!」

「はあい。」

星悦はしばらく、明子の後ろ姿をぼつと眺めていた。

「明石の上や。光源氏が惚れるのも無理はないなあ。奈美ちゃん似やもんなあ。」

「お前さ、せつきからヒトの子にニヤニヤして見とれてるけどな、あいつら、絶対お前みたいな、油が切れてひからびた四十の男やもめなんて、全く興味ないぞ。お前みてはなのの舅なんて絶対俺、なりたくないから。それから、あいつらは、俺似だ。」

「ただ賞賛しておるだけやんか。えらいヒドイ物言いやな。」

「うるせ。それとな、光源氏は、オレだ

「ワケが分からん」

兼壱の前には、湯気立つラーメンがあつた。味噌の香りが兼壱の目尻にしわを寄せた。

「・・・奈美子のヤツ、麺、つまくなつたなあ。俺の方が絶品やけど、これもなかなか。」

豪快に汁を飛ばしながらラーメンに食いつく兼壱には、すっかり笑みが戻っていた。星悦はほっと安堵の息をもらし、イスに体を預け、自分もうまいラーメンをすすつた。

「そういうえば、兼壱、リコーやんには会つたか？」

「つるんと一本、こきおこ良く吸い上げて。

「おう。ちょうど昨日な、鳴浜の方で会つたんや。お前の言つてた通り、元気そうやつたで。そんで、改めて友情と約束の確認を取り交わした。」

兼壱はニヤニヤしながら、レンゲで「一ーンをすべつ。

星悦はタイミングを見計らつて、言つた。

「兼壱、ひとつ言わせてもらつが、親同士の約束のために、子供の人生引つかきまわしたりすんなや。藤子ちゃんも、明子ちゃんも、あおいちゃんも、ほかにしたいことあつたかもしれんのに。元氣もかわいそやで。あいつが嬉しそうに硬球持つて歩いてんの、僕、実は見たんや、」の前

「ギロッとしたままの目が光る。

「なんやて？ 元気が、また野球やつてるんか、コソコソとー。」

「しまつた。隠そつに」も、もう遅い。

「ちやうぢやう、ちやうつて」

「じゃあなんや、チワワか？」

「そやない、体育の時間でな、あいつがソフトボールしているとこ見ただけや。勘違いすんな。あいつは、いつも放課後に、元気にチューバ吹いとる。」

「・・あぶない。うつかり、口が滑つてもうた。

「フーン・・」兼壱は田を細くした。完全に見破られている。そのうち麺が太くなる。

「おつと、伸びてしまつ、食おう、食おつ。」

食事を始めると、今までのことはずつかり忘れてしまう。

良かつた。星悦は背中にへばついた服をゆくつむかせた。

でもな、兼吉。

お前が、リュー ゃんとの約束守りたい気持ち、分かるで。あいつと一緒に普門館の舞台に立ちたかつたお前の気持ちは、僕も持つとる。

でもな、そのために五人も子供生んで、数打ちや当たるやううつて考へで、ポンボコ子供をみんな吹奏楽に放り込むのは、あからで。親のやることやない。

兼吉。元気はな、チューバやのうて、野球がしたいんや。お前も分かつとるくせに。いくら約束でも、リュー ゃん、こんなこと、望んでなんかおらんよ。な、兼吉。

「 そういやあ、玲子さんの話はしつたか、リュー ゃん？」
「え？ あ、いや、なんも聞いとらんけど。」

星悦は思わず溜息をついた。

「 玲子さん、あれつきり、なんかなあ。」

「あれつきり、ていつも、もう十年近くも前やう」「せや。」

「まあ しゃあないつちやあ、しゃ あないけど、でも劉介も、もう落ち着いたんやろ？ せめて居場所さえ分かれば、連れ戻す」ともできるのになあ。」

スープを飲み干し、アア、と兼吉は声を上げる。

「・・あの時、やつぱり帰すんじゃなかつたなあ。といふどよ、おい」

「何や。ポンポン話飛びすぎやで。」

「あのな」真面目な顔を、突然近づけてくる。「・・辰悦の」とは？ 身元、分かつたんか？

茶を飲んでいた星悦は、またむせた。まわりを、そつと一瞥する。

「こきなり、なんや。こんなトコで話さんでも、ええやろ？」

「お前がカワちゃんのこと話すから、俺も喋りとうなつて。」

「メチャクチヤな理由やな」

星悦の吐息がスープを揺らす。

「結果論から言つと、ハテナ、や

「あんな、星悦」更に兼毫が身を乗り出す。「正直、ヤバイと思つで。家族に連絡もせんと、淀川のほとりで六歳の子拾つたまま、その子が高校生になるまで、何も身元を調べずに、自分の子として育ててある、つて。ハタから見たら監禁やで？自由監禁十一年。」

「オイ、僕はナ、なに不自由あらへんように育ててあるわ。中学も高校も、行きたい所に行かせてる。もちろん、大学もそりやうつもりや。それでなにが監禁やねん。」

「まあ安心しいや。俺、これでも法学部のハシクレやから、万一サツに一オわれた時はうまく法律の抜け道見つけて、救い出したる」

「こんな時に法学部か」

「こんな時こそ法学部や。ほかにラーメン屋の店長が法律使つといはあるか？」

「・・・兼毫、厨房戻れば？こんなヒマな話してゐるヒマあるんやつたら」

「ヒマやないで。俺はナ、マジメに星悦のこと心配しとるんや。なんか、正直言つて、今、お前、いい息子に恵まれて、シアワセな生活真つ最中やろ？せやから、そろそろ、暗雲が立ち込めてくるような・・・」

星悦は箸を置いた。

「コトダマ、つて言つやひ？それにな、兼毫。前にも話したけど、僕が辰悦の身内を探さへんのは、辰悦の要望なんや。・・凍ついた、冷たい子供の手のひらで握られて、オジちゃん、帰りたくない、つて・・僕、辰悦の本名すら知らんのや。」

星悦の表情がだんだん陰つていぐ。兼毫は飲みかけたスープを口から離し、箸を置いた。

「あああ　スープがマズくなつてもうた。」立ち上がる。

「兼壺」

「すまね、俺、やっぱ厨房戻る。俺のオゴリだから、好きなだけそこについてろ。」

「あ、いや 僕も、そろそろ店に戻らないと、休憩時間、終わりだし・・」

「星悦」

「は」

「劉介のことも元気のことも、首突つ込まんでエエ。お前には、もつと身近に、もっとせなあかんことがあるやろ」

「

「そいじゃ」

兼壺のダルマの目は一ひとつ笑い、厨房にラーメンの目をもつていつた。

シャラシャラシャラ・・・マラカスの軽快な刻みに、タンバリンやカウベルが飾りをつける。

トップシンバルを鳴らし、バスドラム軽やかに、ドラムセットが曲に加わる。

管楽器はゾロゾロと、楽器を構えて準備する。

さあ、いよいよ始まりだ。

アウフトクトの五連符を合図に、真夏の物語が紡ぎ出される。

「あれ？」

外を歩いていた田岡は、音楽の聞こえる講堂の方を向いて立ち止まつた。

スポーツウェアの大西も、音に招かれ、ラケット片手に外へ飛び出す。

「うわあ、懐かしい曲やわあ。斯波先生、よつやく合奏始めはつたんですねえ。」

「ああ、大西先生。この曲、吹いたことあるんですか？」

「はい。出身校の定期演奏会に、OGとして出演した時に。」

「へえ、じゃあ僕と同じですね。」

「あれつ、田岡先生、まだ楽器続けてましたん？」

「四、五年は前のことですよ。なんか聞いたことがあるなあと思つて・

・確か、『宝島』ですよね？」

「ええ・・・あ、サックスのソロ始まった。あれつて、五組の戸田さんやろか？うまなつたなあ、あの子。」

「でも・・・田岡は具合悪そうに顔をしかめる。」

「なんですかこの口や。全然ノリあらへんと思いません？しかも

何から今までグツチャグチャの吹き放題、好きほうだい。メロディーはハシッていて、伴奏はヒツパツていて、音程なんか皆無
「しゃあないですよ。久しぶりの合わせですし、この曲最初の合奏ですから。」

大西は講堂の方へ歩いていく。

「ちよちよつ、大西先生、どこ行きはるんですか？」
「ちょっとだけ見ていきます。田岡先生もどうですか？」
「ちょっと先生、テニス部の練習はええんですか？」
「だいじょーぶ。ね、ちょっとですから。」

大西は子供のような笑みをこぼして言った。

一回目の盛り上がりが終わりに近づき、曲は一度田のサックス・ソロを迎える。

・・なんでまた、ウチなん？

曜子は隣に座る近藤晋作の横顔を、恨めしそうに眺めた。
近藤は譜面台を見つめたまま、微動だにしない。

実は、曜子はいまだ近藤の声を聞いたことがなかった。彼は常にウツトウしそうな表情で顔を包み、他人が話しかけようとするのを無言で拒むのだった。

・・しゃアないナア・・

曜子は交替を求めるのを諦め、黒くなつた譜面に目を移した。
でも、無理やで、これ。初見で吹くの。

当たつて、碎ける。せやな、それでイコ。出だしが肝心・・・
ん？

心なしか視線を感じる。

気の、精やる。新しい息を吹き込んで

「ストップ！ストップ！」

斯波の叫び声と、指揮台に打ち鳴らされる指揮棒の音。これで五回目だ。

「トダアー！今、一小節遅れて入つたぞ、おい俺が指示出してるか

ら、それ見ろつて！」

「ハ・・ハイツ、スミコマゼン！」

いつになく殺氣のこもった田つきと口調に、さすがの耀子も怖気づいた。

斯波はバンド全体をギロリとねめまわした。

「全、然、ダメだな。リズム感もクソもない。お前らのはなあ、宝島やない

夢の島や…」

講堂が、しーん、と静まり返る。入口からこつそり顔を出していた大西と田岡の二人も、思わず顔を見合せた。

とたんに、殺氣は消え去る。

「あれ？」斯波は指揮棒で頭をつつきながら、羞恥の籠もつた弁解の笑みを浮かべた。

「あれえ？ 今分からなかつた？ 駄洒落なのに。もしかして、夢の島つて、知らない？ 東京にある『ミの埋立地、なんだけど。あかんな、僕も今の子の笑いのツボが分からなくなってきたかも。ハハ・

・・・

講堂に響くのは、斯波の笑い声だけである。

「・・まあ、とりあえず。最初の合奏の、初見でこれだけ吹けたら十分だろう。その上で、一、三注文を付けるとすると・・・ドラムの、横川！」

「は、はい」

「ハイハットとバスドラの動きがぎこちない。それがテンポを後ろへ、後ろへ引っぱる原因になつているから、氣をつけて」

「はい

「それと、ボーン」

「はいっ」

「管、抜きスギじゃないか？ 音、半音下がつて鳴つてるぞ。」

「あつ、すみませんっ」

「で、ホルン。特に、ファーストの、オダ！ お前、そんな切ない音だすな。ホルンはもつと、おおらかで、まわりを包み込むような音

を出さないと。もしかして、吹くんじゃなくて、息、吸い込んでる
んじゃないのか？なあ、オダ・・オダ君？」

返事がない。

「あれ・・君、オダ君じゃなかつたの？」

「いええ、先生、実はあ、僕、『オダ』じゃなくて、『オリタ』なん
です・・」

オリさんはもじもじしながら。

「あ・・・それは、すまん。歴史のせいで、ついオダって思つて・・

」「いえ、いらっしゃりこそ、すみません。楽器も、名前も　　」

「名前は謝らなくとも・・」

斯波は何度も頭を下げるオリさんを見て、微笑を浮かべた。それで講堂の空氣もやや浄化された。

「ところで、白鳥。」斯波はオーボエの方を向く。

「はい」落ち着いた和音の返事。
「ベースがいなきや、合奏が成り立たない。チューバは　浜岡は、
何してる」

「それが・・」和音はクラリネットの未来と顔を見合わせた。

「どうしたんだい」

「今日、新しく吹奏楽部に入りたいという生徒を連れてクラブに来
ると行つていたんですけど・・」

斯波は後ろを振り返る。

「田岡先生、大西先生」

「げつ？」扉の裏に隠れていた一人は思わず顔を出す。

「そこに、浜岡来てませんか？」

「え・・・いえ・・・いませんが。」

「そうですか。ありがとうございます。」斯波は笑つて返す。

田岡は愛想良く笑い返し、すぐに隠れ、眉をひそめて大西を見つめる。

「なあ　斯波先生、何で気づいたんやろ？」

「さ、さあ・・・合奏中、一度も後ろ振り向きませんでしたもんね。

「大西も不安そうに。

「後ろにも田があるんとちやうか?」

「ですよね」

和音が、大西たちと反対側の扉を指差す。

「あ、先生、来ました。」

見れば、元気が忍び足で講堂に潜入しようとしていたところだつた。

「浜岡!」斯波が叫ぶ。同時に元気が飛び上がる。

「ぐわつ と、先生、遅れてしまませんでした! おい、こっちだ

自分のもとへ来た元気を斯波は見下ろして。

「さつきの、ぐわつ、は何だ」

「あいえ、別に何もないです。遅れてしまませんでした。あの、入部希望の人を連れてきました。」

「どの?」

「こちらです」

元気がそう言い、前に引き出した生徒を見て、カオルは思わず曜子と目を合わせた。

あれって・・七色サックスの?

曜子が囁く。

かなあ。あ、でもちがう。ほら。
え?

手にほら、ペットの楽器ケース持つてる。

じゃあ・・七色ラッパ? んでも、他人にしては似すぎてない

?

そう、だよね・・・

「二年二組の鏑矢辰悦です。トランペット希望です。よろしくお願ひします。」

字にすればそれだけの、何の変哲もない一言。しかし、音にすれ

ば、歯切れ良く、リズム良く、小気味良い言葉だった。

「木曜の授業以来だな。よろしく」斯波は晴れやかな笑みを浮かべる。

「 よし、じゃあ、一回合奏は中断だ。各自休憩を取つたあと、もう少し念入りに譜面をさりげて来い。それで、そうだな、十一時半からもう一回合奏する」

普段土田の練習に慣れていない、少ない部員たちは、一瞬顔を歪める。

「うまくいけば今日は終わりだから、張り切つて一時間やろうな。それとサックス」

「はいっ?」曜子は顔を上げる。

「一番田の長いソロ、そこ、吹かなくていい。『田は』一番田のをしつかり練習しとけ」

「はい」曜子の表情は、まだ硬い。「でも、誰がやるんですか?」

斯波は隣の男子に向かつて。

「 鏑矢」

「 はい」

「 サックスの譜面、読めるかい?」

「え・・あ、まあ、だいたいは。」

「じゃあ、やつてくれ」

「え?」

「ソロ。」

「えつ?」この反応は曜子のものだ。そして曜子のものであり、力

オルたちのものでもあつた。

「それじゃ、解散。ちらばれー」

斯波が指揮棒をぐるぐる回す。部員は、三々五々、各自の譜面台を持つて講堂のあちこちに向かつて歩き出した。

「ああ、怖かった。」曜子はヨロヨロ、カオルの肩にすがりつく。

「シバリューも、『俺』って言つんやね。」未来は氣のない笑みを浮かべる。

「でも・・・本当に似てるよね。鏑矢君」とカオル。

「うん。生き写し ていつも両方生きとるな。そり、瓜二つやで、七色サックス千林様と。」

「なんかさあ、ワケあり、って感じやね。ジャズのおっさんに聞こえかな?」

「それはやめといた方がいいんじゃない?」

「そうやで、未来。ワケを聞きたいのはむしろアイツ

おい、

浜岡!」

曜子はチュー・バを取りに向かう元氣の背中を呼び止める。

「 ん? なに?」元氣は振り向く。

「お前さあ、俺は本氣だとかあんだけべらべら喋つといて、なんであつたりとグラバンに戻つて来たん?」

「曜子、ケンカ腰に言わなくとも」

「ああ だつてさ」元氣は寄つてくる曜子たちから、意識的に目を反らしつつ、力のない笑みを浮かべて言つた。「辰悦、元水泳部だつたし、スポーツもできるやつ? おまけにペットの腕はヤバイしや。」

ふと、トランペッタの爽やかな響きが頭上を通り過ぎる。カオルは見た。講堂の入口近くで、辰悦がロングトーンを始めていた。

曜子の眉はゆるまない。

「わ。んで、野球じや見返せないから、もう一回チュー・バに帰つて来たつてことか。」

元氣がダルマの目でカツと睨む。

「見返せねえとか、そんなんじやねーよ! なんつーか・・・」一瞬、元氣はカオルの方に目をやつた。「・・・とにかく、そんなんじやねえ」

「あのかあ、浜岡君」未来がニコッと笑いかけた。

「 ん? 顔をあげる。」

「清流の千林君って、知ってる?」

「ちよちよつ、未来?」曜子とカオルは慌てる。

元気は眉をひそめて上を見上げたが、すぐに首を振った。

「なんで?」

「いや、その千林君って子な、わたしらと同学年なんやけど、鏑矢君とそつくりやねん。いや、そつくりといふか、その まんまやねん。」

曜子は腕を引っぱり、怖い顔で、未来、と息の声で怒鳴った。
「ふーん。」元気は真顔で言った。「俺、千林って奴の顔見たことねえけど、それ、多分偶然やで。遠い親戚とかかもしだねえし。俺は辰悦と小学校からの幼馴染やけど、そんな奴見たことねえし、辰悦がそんなこと言つたこともねえよ。」

東京弁と大阪弁が混ざった口調で、元気は軽く答えた。

「へえ、そう」

「幼馴染かあ」

「じゃあ、気のせいやね。気のせい。ほい、ありがと浜岡、もう行つていいで。」

「 つたくなんやねん!」田、その口調は、

渋々言いながら元気は去つて行つた。

「 それじや、ウチらも練習しよっか

「 そうだね」カオルは答えた。

「 なあ、カオル」

ふと曜子が顔を反らして。

「 なに?」

「 アイツ ほんまに吹ききつてまうんやうつか?」

曜子の視線の先では、辰悦がソロの練習を始めていた。

大西と田岡は講堂を後にし、ロータリーのほうへ向かって歩いていた。講堂の隣の音楽棟の準備室では、貝原が「コーヒーを飲んでいた。

た。

「…どうでした、大西先生」

「何がですか？」

「斯波先生の指揮」

「ああ」大西は柔らかく微笑んだ。「田岡先生は、どう思いはりました？」

「僕ですか？」田岡は少し空を見上げてから。

「いや、こんなこと言っちゃなんんですけど、斯波先生、ワリと、サマになつてましたね。」

「そうですね。私なんか、カツコええなあ、て思いまして」

「やっぱり、大西先生も？」

「はい。正直、私今まで斯波先生のこと、ハーフの土氣がこびりついた同じ服を毎日来てはる、土臭くてカビ臭いオッサンぐらいにしか思つていませんでしたから」

「正直すぎますよ、それ」

「でも 次の合奏で、あの子たちの音、きつと変わると思いますよ。斯波先生の指揮は、どんな音でも捕まえてやるぞつていう、ガツツというか、包容力がありましたからね。あの子たちも吹くことに余裕ができると思いますよ。」

テニスコートの前に来て、立ち止まる。田岡は大西の方を見て。

「大西先生。斯波先生が永岡先生の教え子だつて、誰から聞きはつたんですか？」

「貝原先生です。」

「貝原先生？」

「はい。」また大西は微笑む。「五組の古典が終わつて教室出たとき、貝原先生が通りかかつて、その時にいきなり、大西先生、あなた吹奏楽やつていらしたでしょ？、四組の斯波先生はですね、永岡先生時代の県新プラスのOBなんですよ、つて。」

「ワケ分かりませんね、その展開。」

「永岡先生時代のブラバンっていうと、六組の浜岡君のご両親がそうじゃないですか。それで貝原先生に、じゃあ斯波先生は全国経験があるんですねって言つたら、貝原先生、急に黙つてしまつて」

「何も喋りはらなかつたんですか?」

「はい。」

サア コーイ。カコン。テニスコートから音が聞こえる。

「 そう言えど、確か一年ありましたよ。斯波先生は二歳年上ですから、あれは僕が高一の時ですわ。県新がコンクール出場停止になつて、永岡先生が顧問を辞任して、青海高校に飛ばされたんですよ。」

「出場、停止ですか?どうして?」

田岡は額を押さえて、思い出すように答えた。

「確かにあの年部員の間で問題が起つて、新聞報道にまでなつて、大変だつたんですよ。その時斯波先生は高二でしたから、きっと

。」

「はあ。そんなことが・・」

二人は黙つて、白い講堂を見上げた。

「 ようし 」 斯波は再び集まつた楽団をゆつくり見渡し、大きく腕を広げて構えた。

「それじゃあ、パー カッ シヨンが終わつて、みんなが入つてくるところのアウフトクト。つまり、ホルンとかの五連符のところから下さい。」

「ハイ」

指揮棒を指揮台に、カン、カン、カン、と打ちつける。

「テンポはこれくらい。だいたい一〇八ぐらいだ。僕が一、二、三、
て空振りするから、四のタイミングでアウフタクト入って。いいか
な？」

「ハイ」

「それじゃ」「

「一、二、

ハツ。息を吸う。

ビュロロロロロ

一時間の練習の成果があつてか、だいぶ曲らしくなってきたよう
に思える。ただ、まだ暗譜しきれていないため指揮者をずっと見て
いる者はおらず、そのためドンドン音が後ろへ、後ろへ、指揮が振
られたやや後に音が届くような感じになつていぐ。

「トロンボーン！」自分の耳を斯波は指をする。

いや やっぱり音程は、見逃そう。

それより、完走することが第一目標だ。

オープニングが終わり、曜子がおずおずとソロを吹き始める。フ
ルートのオブリガート。

「フルート、うるさい！飾りなんだぞ！」口元に人差し指を当てる。

「アルトのセカンド、ソロをかき消すな！引っ込め！」

「で、お前は出るんだ、丘田！もつと息入れて！」

曜子は慌てて息を吹きいれる。

ダメ、吹き入れすぎ。それじゃチャルメラだぞ、おい。

「トランペット、一小節速い！」

怒鳴りすぎて、力オルが慌てて縮こまる。

シンコペーションは、金魚のフン状態。切れ目など何もない。

「雰囲気で吹くな！俺を見る！俺だけを見ろって！」

サビが始まる。心地よいファースト・トランペットのメロディにて、

苦しみ悶える小動物のうめき声が混じりあう。

「ホルン！ 虐待されてるみたいな音出すな！」

「バボッ」という爆音が、右の方から・・・

「チューバ！ 音もつと抑えて！」 床に水平に向けた手のひらを、何度も下に押し付ける。

「クラリネット、もつと歌つて！ そう、いい感じいい感じ！」

「ドラム、モタつかな！」

「トランペット、ファーストしか聞こえないぞ。おい、古河、鏑矢！」

斯波は璃紗の方を見た。

西園寺。結構いい音だ。センスがある。とつあえず、音楽に関しては。

オーボエの白鳥のほうからも、快い響きが聞こえてくる。

玉石混交。でもいい。その方がやりがいがある。全員上手い奏者ばかりで集めるなんて、つまらないじゃないか。俺は完璧さを求める音楽よりも、楽しみを共有できる音楽がしたい。

だって、そうじゃないか。競つ音楽がある以前から、楽しむための音楽があった。

でも ちょっとヒドすぎないか？

リードミス。トーンミス。身の毛のよだつ不協和音。せっかくキレイに演奏している人がいるのに、それにゴミをつける奴がいる。

「クラリネット、音程！ ユーフォニアムも！ バリトンサックス、ハシるな！」

「 はあ なんか、疲れた。

指揮を振る斯波の姿が、どこかむなし。

最初のメロディーの再現。次は、アルトサックスの長く立つ

口。奏者は

タラツタツタ

斯波は思わず指揮棒を止める。演奏は止まらない。

はつきり整つた音の粒。音が発せられる度に、粒の中にあるものが弾けだすような、軽く、明るく、透き通つた音。連符をものとせず、三本だけのピストンで鮮やかに奏でる爽快な音楽。

斯波が指揮を振つていないので、氣づいた部員達が、顔を見合わせながら、一人、また一人と楽器を下ろし、最後列のサード・トランペットを思わず見上げる。

辰悦は目を閉じながら、伴奏の消えた講堂に、ただ自分の音を存分に響かせていた。
斯波は、車の中で流れていたCDと、辰悦の音が重なったことを思い出す。

そうか。

「いつの音。なんか聞いたことあると思えば。
アイツの音と、同じじゃないか。いや、アイツよりも、もっとすごいかもしない。」

鎧矢、辰悦

お前、本当に、「鎧矢」辰悦か？

第一樂章 宝島（4）（前書き）

そろそろシバリューの青臭さにも慣れてくださったのではないで
しょうか（笑）。

シバリューというキャラは現在21歳（つまり、カオルたちと同じ年）の作者の未来の姿でもあり、今の作者自身と似た思考回路を持つ人間でもあります。もちろん、カオルや辰悦、元気、曜子といったキャラにも、作者の欠片が散りばめられています。ただ、作者はシバリューほどに熱い人間ではありませんが 汗汗

この小説のこの部分、実は三年前に書いたものなので、いろいろとつたない部分もありますがご容赦ください。現在、ようやく筆を起こし、第一章の途中を執筆中です。

「ありがとうございました。」

ブレザー姿の学生が一人、『樂器店マーキュリー』を出て行く。演奏会の費用集めに来たようだ。星悦は商店街を歩いていく一人を二丁一丁しながら一階の店の窓から見送り、受け取った演奏会のチラシを店の掲示板に貼った。

「息子さん、遅いですね。」従業員の中村が、樂器を磨きながら星悦に声をかける。

「ああ、うん。今日から吹奏楽に入部するんですよ。」

「えっ？ まだ入ってなかつたんですか、辰悦君？ あんなに上手いのに。」

「うん、まあ。あいつ、引っ込み思案だからね。」

「辰悦君が入つたら、県新のブラバンも活氣付くでしょうね。」「だといいけどね。あいつ、本番に弱いところあるし。ほかにもほんまに、分からんことばっかりで。」

「それ、分かります。私の娘も今年で五歳になるんですけど、親の私にも意味不明な行動をよくとつて」

星悦は黙つて自分のデスクに座り、その上にある写真を静かに手に取つた。

辰悦の、小学校の卒業式の写真。カメラを向けられ、無邪気に笑みをこぼす辰悦と元気。

中村は話に熱中して、まだ一人で話し続けている。一方で、星悦は十年近く前の情景を思い出していた。
名前は、なんていふんだい？

大人用の厚手の毛布で身をくるまれた幼い子は、なにも答えない。

それも、教えてくれないのか？

幼い子は、透き通った瞳を星悦に向けたまま、反らさない。

家族に知らされるのが、そんなにイヤか？

「コクリ、とその子は頷き、小さい声で、おじさん、と呼んだん？」

その子は一瞬うつむいたが、すぐに星悦をまっすぐ見つめて言った。

「ボク、おじさんの子どもになりたい。」

紆余曲折があつたあと、結局、星悦はその子と約束をし、その子が辰年生まれだったので、辰悦という名前にし、自分の子として育てるに決めた。兼壱が機転を利かせてくれたおかげで、商店街の人から不審がられるることはなかつた。

あれ以来、星悦はその子との秘密を守り抜いてきた。家族は探さない、知らせない。それでよかつたと思っていた。

でも、どうなんやうつ。本当のところ、やつぱり僕つて、マズイことしてるんやろか。

星悦は写真を見つめながら、長い溜息をついた。

「 よし、じゃあ今日はここまで。みんな、お疲れ様ア。」

昼食休憩も取らないまま、結局合奏は一時前に終わつた。斯波の発した解放令に、部員はフウと大きな息をつき、へたりこむ。

「 それと、この曲、六月の文化祭でやるから、キッチリ練習しどけよ。明日は自主練にするかわり、来週の土曜にはまた合奏やるから、そのつもりで。」

『合奏』の言葉に、部員の顔が暗くなる。

すつゝと和音が立ち上がり。

「今日は終礼ありません。自由に解散してください。」

言われなくても、みんな早々と楽器を片付け、帰り支度を始めている。

特に璃紗は必死だ。

「どーしょお。バイト遅れるわ

んじゃ、カオルちゃん、バイ

バイ

「うん。バイバイ」

カオルも譜面台をたたみ、ツバを捨てて、立ち上がった。

「いい音だね」

不意に右側から声がした。いきなり言われたのと、その内容に驚いて、思わず。

「え? どこが?」

辰悦は気さくな笑みを浮かべた。

「なんか、サビみたいなところあるじゃんか。そこのところが、すごく楽しくてのびのびした音だった。」

「え・・・でも私、ボーンとペッタだけで吹くところ、音高すぎるから、吹きマネしてたんだけど・・・」

「無理に高い音出さなくていいと思つよ。低い音のこで響きが高音でも出せるよつ」、ゆつくり練習していくべきこと思つへ。」

「あ どうも、ありがとうございます。」

妙にくすぐつた。こんなことを言われた時は。

「 鏡矢君、ソロ凄かつたね。いつからペッタやつってるの?」

「小三の頃から」

「あ、だよね」 なんだかホッとした。

辰悦は立ち上がる。

「がんばろうね。文化祭に、間に合つよつ」。

「そうだね。」

「それじゃあ」

「うん」

「カオル～！」未来がこっちを向いている。

「みんなでさ、元気君のお店に食べに行かへん？元気君本人を連れていけば五割引だつてさあ！ね、曜子もさあ！」

「でも、未来。」和音が肩を叩く。「元気、もういないよ？」

和音はポツンと置かれた椅子を指差して。

「え！もう帰ったの？ ハヤテ？」

「ううん、帰つてないと思つわ。多分」「どこ？」

「ゴメンやけど、ウチ、今日はコンビニで済ませるから。」

曜子はサックスをストラップに吊り下げるまま、譜面台を持つて立ち上がる。

「え？何で？まだ練習するん？」未来の瞳は白黒だ。

「うん。ちょっとソロやらんと、マズイっしょ。あ、コード、とい

うわけで今日施錠ウチがやるから、先帰つておいて。」

「うん・・いいけど、明日自主練だけど、いいの？」

「うん。」

「曜子」カオルは親友に声をかけた。

曜子は振り向かない。ただ一点を見つめている。

「あんな、アッサリ吹かれて、たまるかよ。」

楽器を片付ける辰悦を、ずっと睨みつけている。

「うん」カオルはうなずく。

「絶対、上手くなつてやる。」

「うん。」カオルはうなずいた。

夜。静かな横丁商店街に、一台の車が止まる。

『 準備中 営業時間 午前十一時～午後二時半 中華亭・
　　・・夜、やつてないのかよ。』

斯波の肩から力が抜ける。

あの時、言つてくれた良かったのに。

店の中は、黄色い光に満ちていた。恨めしそうに、しばしの間たたずむ。

ふと、後ろを振り返る。向かいは星悦の店、『マー・キュリー』。

こちらも、まだ、一階の店に明かりがともっていた。

そして三回では、白い光りのもと、薄つすらとカーテンに映った影が揺れていた。

なにかを思い、しばしの間、明かりを見つめる。

一度踏み出しけた足を引き戻し、斯波は車の中に入つていった。

その車を見送る、一人の影。

「・・先生？」

元気の手には、硬球が堅く握られていた。

・・

新天市の西隣、浅倉市である。

百坪を超えそうな邸宅の立ち並ぶ住宅街に、穏やかな朝が訪れた。

その中で、道に向かつて横に広いガレージを構え、緑の垣根で周囲を覆つた、一際目立つ豪邸があつた。表札には「千林」とある。整理された広いリビングの中央に置かれた長テーブルに皿を並べながら、藍は父の背に話しかけた。

「お母さんのいないバースデー・パーティも、今年で十七回目やね。

」
対面キッキンで「一ヒーを入れていた父が振り向いた。鋭い目をして。

「いや、十一回目だ。」

脅迫するような父の目つきに、藍は思わず口籠つた。

「あ・・・そ、うやわ。あたしももうボケてきたんかな。ハハハ・・・」

笑みはぎこちない。

裕也はグラスを両手に持つてテーブルに寄ってきた。

「よく眠れたか？」

「うん。ありがと。」

手渡されたグラスに、口を近づける。

「・・・ウーン。久しぶりにお父さんのアイスコーヒー飲んだけど、味は全然落ちてないわ。」

「何を抜かすか。」

裕也の目が和らぐ。

「仕事の方は、順調なのか？」

父の言葉に、藍は思わず苦笑して。

「お父さん、これでもう二回田やで？ うん、トラックの方は最近仕事も増えて、いろんな高校行けて結構楽しいで。やっぱ高校生は若々しいわ。みんな元気で、しばらくぶりに前搬出の依頼受けた学校の楽器運搬に行ったら、ちやんと覚えていてくれて、なんやす！」嬉しそうな気分になつたんよ。」

長女の藍は、去年の春、とあるトラックの運送屋に就職した。普段は学校給食を届けに小学校や中学校を訪れるが、演奏会の日やコンクールの季節には、市の内外の高校にも出向いて楽器の運搬を引き受けている。

「やけど なんでそんなに仕事のこと聞きたがンの？」

「え そんなに聞いていたか？」 答えに戸惑つて。「そりや・・・娘がうまくやつているかどうか心配するのさ、親として当たり前のことだろ。」

そうではない。そんなことではない、自分が考えていることば。あの時のことまだ吹奏楽界で話題にのぼっていないか、明るみに出でていなか、ただそれが知りたいだけなのだ。

娘は何も察しない。

「またアそんなことを言つ。はいはい、心配おかげして、誠に申し訳ございません。でもあたしももう独立して、結婚もしたンやから、いつまでも子ども扱いせんといってくれる?」

「そりは言つてもな・・・」

裕也は藍の顔を見つめた。表の庭が少しかげつた。もの寂しげな裕也の瞳には、亡き妻の面影が映つていた。

「・・あたし、聖斗呼んでくるわ。」

父の視線から顔を反らして、藍は立ち上がった。裕也は表の庭に目をやり、ネガのように反転した妻の残像を追つていた。

「聖斗 つ、」はんだよ。起きてる?」

「はあい、今行くから。」

残像はぼやけ、やがて一つに分離する。

階段の方から音がして、息子がリビングに入つてきた。

「おはよう、父さん。」

剃つて薄くなっているが、きりつとした原型をとどめた眉、高めの鼻、奥に何か光るものがある、大きく、鋭い瞳。

「おう。」裕也はそれだけ言い、あとは満足げに息子を心ゆくまで眺めていた。

聖斗は、裕也が指揮を振る清流学院吹奏楽部で、アルト・サックスを担当している。誰から学んだわけでもない、卓越した豊かな表現力と技術の高さは、彼が生来サックス奏者としての資質を備えた人物であるだけでなく、人一倍の努力家であることを物語ついていた。来年のサックス・パートリーダーにふさわしいということは、親の裕也だけでなく、部員も同じ考えであった。

テーブルの皿に藍が父の料理を盛りつける。やがて三人が席につくと、藍が。

「ほなら、お父さんの四十三歳の誕生日を祝つて・・・乾杯!」

「乾杯」

カン、とグラスが軽く音を立てた。飲む間の、しばしの沈黙。

ああ、と聖斗は真っ先に声を漏らした。

「やっぱり、父さんのアイスコーヒーはおいしいですね。」

息子の褒め言葉に、父の口元が緩む。

「調子は、大丈夫そうだな。」

「はい。定期演奏会のあと、しばらく音の具合が良くなかったんですけど、このところは低音もよく響きますし、調子もだいぶ戻つきました。」

「そうか ほかの奴はどうだ？」

「そうですね 滝井は最近一層音が鳴るよくなりましたし、橋本は指回しが速くなつて、ビブラーートのかけ方も上達しましたね。演奏会でソロが成功したので自信もついてきたみたいです。墨染は演奏会前からの不調をまだ引きずっていますが・・あ、山寺は毎日休まず練習している甲斐あつて、今伸びてきているところです。」

「山寺・・あのヘタクソが？」

裕也は鼻で笑つた。

中高一貫の私立で、学業でも部活動でも名門校である清流の吹奏楽部では、毎年、新入生の入部テストがある。ただ、去年は高校からの入学者の入部希望者があまりに少なかつたので、仕方なく入部テストは廃止したのだった。その為、全国レベルの強豪校の部員の個人の技量に、バラつきが出来てしまつたのだった。

山寺のトランペッタは、今はまだしも入部当初は、とにかく、聞くに堪えない音だった。コンクールで地区落ちのレベルだろう。裕也は彼を入部させたことを心では後悔していたが、聖斗の言うところの、彼の熱心な練習態度を見て言い出すことができなくなり、今は彼がどこまで伸びるか見守ることに決めた。一度は他の楽器に変えようと試みたが、彼の前に立つとその意志は全て無に帰つた。

山寺はいつもトランペッタを手にしていた。そし誰とも接することなく、ただ一人で黙々と譜面台に向かっていた。一日中、校舎の裏で立つたまま。

そんなに好きなのかよ、トランペッタが。

裕也は呆れに近い感心を彼に抱いていた。

ずっと下手でも続けるか？

絶対に追いつけない才能を見せ付けられても、その楽器が好きか

？

俺なら、ヤだな。

藍は一人の会話をおかしそうに聞いていた。

「いやだ、二人とも親子なのに、その話し方じやまるで先生と生徒みたいやね。」

「あ・・」裕也と聖斗は顔を見合わせた。

「・・・そりゃあ仕方ないだろ。聖斗は部活で父さんと顔合わす方が多いんだから。」

「あ、そつか。清流つて練習忙しいのに、何で聖斗家にいるんやろうと思えば、そうか、父さんと母さんの誕生日は部活休みなんやつたね。忘れとつたわ。ハハハ・・」

「何を今さら」

インターホンが鳴る。

若い執事がノックをし、部屋のドアを開ける。

「旦那様、一色様がお見えです。」

「ちょっとすまん。」裕やはフオーラークを置き、席を立つた。

一色の名に聖斗の瞳がゆらぎ、急いで父に尋ねた。

「父さん」

「ん」

「・・もしかして、一色さん、海斗の居場所が分かったの？」

裕也は咳払いをし、服にこびりついた朝食の汚れを煩わしそうに

払つた。

「さあな。別の用件だろ。」

「もし海斗の話なら、すぐに俺に教えて下さい。お願ひします。」

「分かつた、分かつた」

裕也は背中に次々と降りかかる聖斗の言葉を、急いでドアで遮つ

た。

バタン。

メイドがきれいに掃除しておいた接待用の和室に、一色の姿があった。

「それで、何か分かつたのか？」

一色は鋭い目で裕也を見、黙つて一片の紙切れを机に置いた。

「・・・東山のあるマンションの住所と、そこに住んでいた住人の名前だ。百万遍付近で浦島と思しき男を目撃したとの証言を頼りに調べたところ、この男が浮上してきた。」

鋭い眼は確信に満ちてギラリと光っていた。

裕也は紙に書かれた名と、渡された写真を見比べた。

吉田信一、三十六歳。清掃員。妻子は、無し。

年を重ねて老けてはいたが、間違いない、ヤツの顔だった。

浦島英亜。あの、ヒデキ。

裕也は怪訝な顔を上げた。「住んで、いた？」

「ああ。一ヶ月前に部屋を出ている。管理人には、立川に引っ越すと告げたらしい。」

「立川？新天市の、立川か？隣町じゃないか。」

「・・それが、部下に調べさせたところ、立川に住む十三軒の吉田のうち、あいつの家は一つもなかつた。やはり、また名前を変えて住んでいるようだ。」

一色はチッと舌を打った。

「それがよ裕也、あいつの主な仕事場の一つに、警察署があるんだ。

「・・・・・！」

「だから嫌な予感がするんだよ、俺。あいつなら、やりかねないだろ？」

「・・昔の事件を、調べるひどとか？でもあの事件は、確か和歌山で

「まあな。俺は警察のことはよく分からぬ。でも推理小説とかで

よ、他の県の警察が事件の捜査に加わる」とてよくあるじゃないか。備えあれば憂い無しだ。」

「よく分からないが・・・でも十四年も前の事件だ。そんな事件を多府県の警察動員して捜査できるほど、警察も暇じゃないだろ?」

「でもな裕也、まだ時効」

「コン、コン。

「！」

「？」

襖を軽く叩く音は、一人の胸を激しく突き刺す。

「お茶をお持ちいたしました。」

青年の若々しい声がする。さーっと、裕也の体から、しびれがとれる。冷や汗をかいだ。

「入れ。」

「失礼いたします。」

和室の襖をゆっくり開き、先ほどの執事が現れた。

黒い礼装のようなものを着、素手で盆に載せた茶を一人の前に置いた。一色は置き物のように身動きせず、彼が深々と礼をして部屋を出るまで、一度たりとも目を離さなかつた。

一色、おもむろに口を開きて、いわく、

「すまん、口が滑った。」

「いや、大丈夫だろう。襖を叩く音とカブツたから。」

「今度の執事は ちゃんと仕事、だけを、しているか?」

「ああ、高木はよく働いてくれる。料理も得意なんだ。」

声を低くして。

「・・書斎には。」

「入れてない。」

「よし。」一色はゆっくり頷き、旨い茶を少し飲んで、すぐに口を離した。

「裕也、でもよ。執事なんて表向きはおとなしそうでも、裏では何

離した。

していられるか分からぬ。浦島のことによく学んだはずじゃないか。
・・・亡くなつた奥さんのためにも、もう執事なんか雇わない方がいいんじゃないかな?」

「藍も結婚して家にはたまにしか来なくなつて、この広い家には俺と聖斗と高木の三人。俺も聖斗も料理が出来ないんだ、執事やメイドがいなけりやどうやつて食つていけばいいんだよ?」

一色は眉間にしわを寄せながら、和室の高い天井を見上げた。

「こんなバカデカイ家を売り払えば、一生外食でもやつていけるだらうさ。それに、この家にいたままじゃあ、いつまでも昔のこと囚われることになるだらう?」

湯茶に波紋が浮かぶ。

「どういふことだ」

「どうもいつも。ここには一人の奥さんとの思い出があるし、浦島の足跡も残つてゐるし、それに、その、新聞記者のカメラだつてあるだらう? だいたいカメラなんてそんな重要証拠、とつとと捨ててしまつた方がすまん、また口が滑りやがつた。」

「カメラは書斎のある所にしまつてある。それに、フィルムはとつくに焼いた。」

茶の色が濁る。話題に飽きたのか、裕也は大きく息を吐き、顔を若干明るくして言った。

「ところで、海斗の方は何か調べてくれたか? 聖斗のヤツがうるさいんだよ。」

「そりやあ、双子の兄貴のことだ。弟が心配するのも当然だろ。氣にもとめない親のほうがどうかしてるよ。」

「しようもないこと言わずに、はやく言え。」

「ちょい待ち」一色はぐびりと茶を飲み干し、鞄から新たなファイルを取り出した。

「何でもでてくる鞄だな」

「まあな。ほいこれ、聖斗が沖田の息子から聞いた話を頬りにして、中学の水泳大会に出ていた、聖斗によく似た平泳ぎの選手の名前を

探した。すると いたいた、一人海斗らしき子が見つかったんだ。

頬杖をつき外を見ながら聞いていた裕也は、思わず手を払い、顔を一色に向けた。

「誰だ？」

一色はファイルを見せ、一人の名前を指差して言った。

「これが例の中學の水泳部の連絡網。で、これが海斗と思しき奴だ。

「裕也は田を凝らしてよく見た。

「・・・ 鏑矢、辰悦 鏑矢ア？」

ファイルから田を離し、ビットと笑い出す。

「鏑矢って、それじゃあまさか、あのトロンボーンの星悦の息子か？」

「多分。」

「いや、有り得ない、有り得ない。もし本当に海斗だとしても、あんな下手な奴に育てられたんじや、楽器吹かせてもダメだな、絶対・

・・・

「顔色変えない一色に、裕也は思わず口元もむ。

「・・すまん。言ひすぎかな。」

「いや。なあ、裕也・・・」

「何だよ」

「つてことは、海斗にも楽器を吹かせるつもりなのか？」

「

裕也は顔をしかめ、喉の中でもうなつた。

「冗談だよ。本氣で言うと思っていいんのか？」

「まあ。別に良いけど。それでな 一色はファイルに目を移す。「」の鏑矢つて子、沖田の息子と鉢合わせになつたその試合のあとで、すぐに部活を辞めたらしい。その水泳部の別の奴に彼のことを聞いても、誰もが知らないって一点張りだそうだ。だから、俺はますます海斗のような気がしてきてな・・・」

「 」

裕也は顔を曇らせたまま、晴れた庭の方を眺めたまま、何も言わない。

「 …ここに、聞いてんのか、俺の話？」

「とりあえず」一色は机に手をつき、ゆっくりと立ち上がった。
「浦島の件はそういうことだ。それから、もしかすると浦島みたいに姿をくらましたかもしれないが、一応ここにある鏑矢の電話番号にかけてみるよ。イヤなら、俺が代わりにかけるからさ。それでアポ取つて、一度会つてみる。」

「 」

「ちょっと聖斗に会つていいくよ。それじゃあな。」

「 勝則」裕也の目が動く。

「お?」

「 星悦に、聖斗を会わせるのか?」

「ああ。ありがたいことに、あいつは俺には敵意がないからな。」

「ふざけるな。あれはお前が」

「おアイゴだろ。この話はしないつて言つたぞ?」

「お前が言い出したんだろ」

「・・そうだけ?まあいい。俺の好きにさせりよ。んじやな」

一色は部屋を出た。

裕也は溜め込んでいたものをすっかり吐き出し、静かにファイルを手に取つた。

鏑矢、辰悦。

以前家に入つてた、あいつの楽器屋の開店セールのチラシにあつた電話番号とおなじ。ということは、やっぱりあいつの子供か。それなら今も新天にいるはずだ。しかしそれならいつ、どこで海斗に会つた?あの時、家内と子供ふたりは大阪にいたのに…。

再び、庭に影が差した。

一色は長い廊下の向こうにある、聖斗の部屋へ向かっていた。

廊下には、黄色い音が染み込んでいた。

アルトサックスの、太く、明るく、響く音。

エキゾチックな旋律と、リズミカルな音符の群れで、廊下は浸されている。

軽く戸を叩き、中に入る。

音の世界が、たちまち消える。

「一色さん」

「『スペイン』か。お前が吹くとの曲が一倍に良くなるな。」

「お世辞をありがとうございます。」聖斗は笑った。「この前定期演奏会が終わつたところなのに、もう一ヶ月後のサマーコンサートに向けて練習しなくちゃいけなくて。でも、マーチングのグループは、今日も休みを返上して練習だから、それに比べたら、まだましかなあつて。」

「ハハ・・裕也のヤツ、今年はコンクールないんだからもう少し休めばいいのにな。」

部屋には、有名なサックス奏者のポスター や、ずらりと並べられた吹奏楽のCD、そして中等部のころからのコンクールのパネル写真があつた。

「三年連続全国に出場したら、翌年は否が応でも出場不可だなんて、考えてみればひどいもんだよな。お前のサックスを東京の奴らにも聞かせてやりたいのに。」

「俺は来年があるからいいんです。可哀想なのは先輩たちですよ。」

「まあ、そうか。」

一色はベッドの縁に腰掛けて、ポスターを眺めながら、ぽつりと呟いた。

「海斗が楽器吹いてたら、何の楽器やつていたんだろうな?」

聖斗の方に向き直り、アイソ良く笑う。

「お前と顔がそつくりだから、やっぱサックスかな?」

聖斗は首を軽く横に振った。

「海斗と俺は双子だけど、口元だけが違うんです。俺は母さん似で、海斗はどちらかといふと、父さん似だと思います。」

「それじゃあ、トランペットだな。いいなあ、兄弟そろって、吹奏楽の花形楽器だな。」

「でも、父さんが許さなかつたでしょ?」

聖斗はサックスをいじりながら、力なく笑った。

「・・・小さい頃、海斗が父さんの書斎に入つてトランペットで遊んでいたら、父さんがものすごい剣幕で取り上げて、海斗を思いつきり殴つたんです。海斗と俺は三歳の時からピアノをやりはじめたんですが、あの頃でもう海斗は上級の曲も弾けていたんです。だから音楽するなら俺より海斗のほうが向いているのに、つてその時は思つて・・」

一色は口を開じ、黙つて聖斗のほうを見た。

一色は、もともと笑つた状態で出来上がつた顔で、無意識的に口元が緩み歯を見せて、いつでもにこやかな様に見え、空気を柔らかくする雰囲気を持っていた。しかし、この時は、一色の口元からは笑みは消え、神妙な表情を顔に浮かべていた。

違うんだ、聖斗。

あいつはな、裕也はな、海斗がそうだったから海斗にしきつに手を上げたんだと思う。

俺の読みが当たつていたら、聖斗、お前も氣の毒なものだ。

「一色さん」聖斗は一色を見た。何かを求めている眼だ。

「海斗に会いたいか?」

一色は直ちに聖斗の心を見通した。

「え・・・?」聖斗の瞳が揺れる。「一色さん、海斗に会ったの?」

「いや、会つてはいない。人違いかもしれないが、前沖田が言つて
いた水泳部の男子の居場所が分かつたんだ。」

「きっとその人だよ！沖田は確かに俺にそつくりの男子を見たつて
言つていたから！」

聖斗の心が弾んでいるのが一目で分かる。

なんせ、海斗が行方不明になつてから、もう十一年も経つて
のだから。喜びもひとしおのはずだ。

「そうか、そうか。んじゃあ俺が、今海斗が世話になつているところに電話して、お前と会えるようにするよ。また今度電話するから、
楽しみに待つておけ。」

「ありがとうございます、一色さん。」

聖斗の晴れやかな笑顔に、一色は十一年間ほとんど海斗の捜索に
関心を寄せなかつた、父・裕也のしかめ面を合わせていた。

第一樂章 宝島（5）（前書き）

第一樂章最後の部分です。

もし「宝島」の音源が「ございましたら、それを聴きながら読んでください」といれしいです。

シバリューが勝手に脳内で妄想して作った青臭い詩も、聴きながら読んでくださいと、少しばは意味が分かるかも? しません(笑)

それでは、また、第一樂章の「パクス・ロマーナ」で。

一、二、
ハツ。

ブリルリル

ん？

気のせいいか？いや、本当だ。

今日は、やけに音がいい。

なんかいいコトがあつたのかな。

怖いほど真剣な顔を自分に真つ直ぐ向ける田を見た。

なるほど　やつと一生懸命になつてきただのか。

でも、まだ本氣じやないだろ？

お前らのホントの能力は、こんなんじやないはずだ。

「ダメだ、ダメだ」

斯波が指揮棒をカンカンカンと鳴らす。

「てんでバラバラじやないか。どうしたらそんなにズレて演奏でき るんだ。」

斯波の言葉に、部員は黙つてうつむいてしまう。

「おそらく」斯波は指揮棒を額にさし、田は上を見上げている。「イメージの問題だな。全体的にはおおよそ譜読みも出来ていいし、音も正しく鳴らせているんだけど、頭の中で考えていることがある意味でひどく個性的だから、こんなにまとまらないんだろう。よしじやあ今から俺が勝手に物語作るから、その情景を音に載せて吹け。

「モノガタリ」

「ですか？」

「そうだ。いいか、よく聴いてな　ある所に、一人の子供がいた。その子はとてもなくデッカイ夢を持っていた。そうだな、メジャー・リー・ガードもノーベル賞受賞者でもなんでもいいんだけど、ここでは、ウイーンフィルの首席奏者とでもしておこう。子供の頃は無邪気だから、頑張れば絶対にプロの演奏家になれる信じていたんだ。でも、中学になり、夢見心地に吹奏楽部へ入部したとたん、ずば抜けた才能に出くわし、自分が途方もなくちっぽけなことを思い知らされ、その子はひどく傷つくんだ。プロの音楽家なんていう夢を持つっていたことがバカらしくなり、自分からどんどん差をつけていく仲間に嫉妬を感じるようになる。もう、音楽なんてイヤだつて、投げ出してしまって、でも何年か経った時、胸の中からウズウズと、もう一回夢を追いかけたい、っていう思いがこみ上げてくるんだ。そしてその時、大人になったその子は悟るんだ。大きな夢は一生の宝物で、見つけてつかむことができるかは分からなければ、迷つたり挫けたりしながらも、その宝を探し続けることが大事なんだ、つてさ。」

斯波の眼には、いつからか、音大で自分の力量に愕然とし、路頭に迷い込んでいた頃の自分の姿が浮かんでいた。

「つまり、この曲の題名である『宝島』は、その子の夢が実現する楽園、という比喩で、宝である夢を求めて、尻込みせずに足を踏み出そう、という意味なんだ。　ていうのはどう?..」

部員はしんと静まり返ったまま、反応が返つてこない。斯波が苦笑する。

「・・あ、やっぱダメかな?クサすぎる?」

すると、戸惑いながら、曜子が口を開く。

「いえ・・先生って、なんだか・・」

「詩人ですね。」未来が続ける。それで楽団にも笑顔が戻った。

「よし。やるか。」斯波の両手が広げられる。

「ハイツ」小気味いい返事が届いた。

斯波はパー・カッ・ションの方を向き、指揮棒を振り上げた。

マラカス、タンバリン、カウベルのサンバのビートが始まる。律人のドラムもノリがいい。

(さあ、行くぞ。)

斯波はプラスの方に眼をやる。全員と田代が合ひ。サツ、と楽器が構えられる。

オープニングの五連符。

一、二、

ハツ。

トゥルルル

夏空に輝く 偉大な入道雲
大海原にそよぐ 虹色しおかぜ

「そう！」満足げに斯波が叫ぶ。
宝島が目に浮かんでくる。
サックスのメロディーが軽やかに、感情豊かに、描き出す。
白い太陽。青い波。緑の島。
曜子が立ち上がる。見せ所のソロがやつてくる。

いまも 夢に 見ている 無邪氣に 夢中に 無謀に
叶わないと 決めつけて 捨てたはずの夢

「いいぞ、戸田！」
サビが始まる。

宝の島へ行こう 瑠璃色の海 広い空
心に描いた 地図を持ち 戸惑わずに 踏み出そう
夢は宝 つかもう 途方もない 空想でも

もし 途中で 道に迷つたら 戻ればいい

バンド全体が一体になつてゐる。斯波は震えを感じていた。
これだよ、これ。俺が長年味わいたいと思つてしたもの。一体感。
重厚な響き。

夏空を彩る 星のかけらたち
椰子の実のほほ 撫で 風は走り去る

六月の文化祭の本番。暑いライトに照らされ、楽団は宝の島に近づいていく。

さあ、この後が、あの連符のソロ。辰悦の出番である。
辰悦はゆっくりと立ち上がる。スポットライトが一点で集中する。

ソロの始まりだ。

傷ついた 幼い心
昇りきれぬ 壁に背を向け 生きていつと
弱さかくし 強がつてた
あの日は 忘れない

晴れ晴れとして流れるトランペッタのせせらぎを聞きながら、斯波の脳裏によみがえる。

高校一年の時、自分の楽器を買いたいと永岡先生に申し出たときの、先生の言葉。

ボクは、君に無駄な買い物はさせたくない。

高校二年の時、裕也が風邪をひいてソロを吹くハメになり、必死になつて演奏会に間に合わせようと練習を重ねていた日々。なんか成功を収めた後日、指揮を振った副顧問が俺に語った、本番までに何度も先生が準備室で語ったという、痛恨の言葉。

なんであんなヘタクソにソロを任せるとや。すぐに辞めさせろ。

だから俺は頑張った。本当に必死になつて。それでも、いくらやつてもまわりの奴に追いつけず、後輩の方が評価が良くて、俺はすぐにはバテて吹けなくなつて、口の中何度も切つて、コンディションなんか最悪で・・・でも、頑張った。

高校三年の春、合奏中、当てられて吹いたとき、先生が口にした言葉。

シバ、上手くなつたな。

それなのに・・・

コンクールメンバー選考審査のある朝。

講堂の物置にやつと見つけた俺の楽器は、鈍器で殴られ、その原形をとどめていなかつた。

すぐに犯人は分かつた。俺は登校してきたばかりの裕也を引っかみ、兼壱と星悦に止められるまで殴り倒し続けていた。

選考審査、中止。保護者会、教育委員会、ありとあらゆる報道官。コンクール出場は不可、永岡先生は責任を取り顧問を辞任、俺は高校を退学処分になつた。なのに、俺の楽器のことは兼壱たち以外には誰にも明かされることなく、裕也たちは最後まで夏を奪われた哀れな被害者を演じていた。

高校の思い出は、絶対に、美化しない。

そう決めたのに。なぜだろ？。一年の夏に吹いたこの曲に弾んだ心は、今でも覚えてる。

胸にトランペットを構え、辰悦が礼をすると、わあっと大きな拍手が帰ってきた。

一瞬、辰悦は指揮者の方を見た。斯波は満足げにつなずいた。パー・カッショーン・アンサンブルの豪快な演奏の後、トランペットとトロンボーンが、ザッと立ち上がる。

コニゾンで魅せるハーモニー。高音だから、古河なんか赤い顔してゐるのに全然音が飛んでこない。つい数十年前の俺みたいだな、お前。隣で涼しげに吹く西園寺。あれは、負けず嫌いの奈美子だ。

「コイツらだけには、何が何でも味合わせたくない。」

頑張って、頑張っても、ダメなことがある。そんなの、高校生にはあまりに残酷すぎる。

「コイツらだけには、何が何でも味合わせてやるぞ。」

頑張って、頑張っても、ダメなものなんて何もないんだって。

フルマーテで、再びサビへ。

それでも 探そう 見果てぬ dream 見飽きぬ treasure
re

限界は 思つているよりは はるか遠くにあるから
笑われてもいいさ 目指すのは ボクだから
努力すること 強くなること さあ

コーダへ飛ぶ。いよいよフィナーレだ。

行こう 夢 きっと かなうから
ツダツダ！

低音のシンクロペーションを腕でつかみ取り、斯波は指揮棒を下ろした。

間髪をいれず、拍手に楽団は迎えられた。

斯波はバンド全員を立たせ、聴衆に向かつて礼をした。

長く続く拍手。アンコールを促す声。

斯波は後ろを振り返り、歓声を受ける奏者たちの顔を見た。みんな、思わずこぼれる笑顔を、斯波に送り返した。

これならイケる。ゼッタイ、いける。

斯波の心に何度も、何度も、その台詞は反響した。

電話が鳴っている。

「はーい、はーい！」

トイレのドアを押し開けて、星悦は受話器へ走る。

「なんで中ちやんおらへんのやろ　　はい、お待たせいたしました
た、楽器店『マーキュリー』責任者の鏑矢と申します。」

「　・　・　」

電話の相手は笑っていた。

「もしもし？」

「　久しぶりやな、星悦。俺のこと覚えてるか？」

「おれ・・・？」

眉を潜めた星悦に、過去の音声がよみがえる。

「　ああー久しぶりやなあー」

(第一樂章 終)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4590o/>

栄光をたたえて TEP × MURT

2010年10月23日03時49分発行